大和郡山市文化財調査概要　26

高月遺跡第４次
発掘調査報告

（添下郡京南６条４里・５里々境溝の調査）

１９９３．３

大和郡山市教育委員会

大和郡山市文化財調査概要　26

高月遺跡第４次
発掘調査報告

（添下郡京南６条４里・５里々境溝の調査）

１９９３．３

大和郡山市教育委員会

例　言

1．本書は、大和郡山市小林町で実施した、高月遺跡第４次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業を契機として実施した。調査面積は、約800㎡である。

3．調査期間は、下記のとおりである。

（試掘調査）　平成４年８月20日～同９月４日

（本 調 査）　平成４年９月７日～同10月16日

4．調査は、下記の組織で実施した。

(1) 現地調査

〔調査員〕　山川　均（大和郡山市教育委員会）

〔補助員〕　荒木浩司、本村充保、佐藤亜聖（以上、奈良大学）、武田浩子、酒井恵子

〔作業員〕　岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、市井義治、谷渕喜一、喜多美寿子、杉岡雪子、杉岡克子、米田郁子、藤川ミツエ

(2) 事　　務

大和郡山市都市整備部

大和小泉駅前土地区画整理工事事務所

5．本報告書は、下記の分担で作成した。なお、金原正明氏には、SD-01の花粉分析に関する玉稿を頂いた。

〔執筆〕　Ⅳ章　金原正明（天理参考館）、他は山川

〔製図〕　山川、武田

〔編集〕　山川

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　調査の概要
　1．層　序 …… 2
　2．遺　構 …… 2
Ⅲ　ま と め …… 9
Ⅳ　高月遺跡４次調査の花粉分析と農耕について …… 12

図　目　次

図１　大和郡山市の位置
図２　調査地点位置図（S：1/25,000） …… 1
図３　調査区南壁土層図（S：1/40） …… 3、4
図４　検出遺構平面図（S：1/200） …… 3、4
図５　SD-01堆積土層模式図 …… 5
図６　SD-01土層断面図（S：1/40） …… 6
図７　SD-01変遷模式図 …… 7
図８　SD-02土層断面図（S：1/40） …… 8
図９　SD-03土層断面図（S：1/20） …… 8
図10　SX-01土層断面図（S：1/40） …… 8
図11　調査地周辺の復元条里 …… 11
図12　SD-01　№３横断土層図 …… 12
図13　花粉組成図 …… 16、17

写真目次

写真１　花粉顕微鏡写真１ …… 19
写真２　花粉顕微鏡写真２ …… 20

V　考察編　目　次

写真　奈良盆地の現在の条里景観

図１　奈良盆地における条里制関連遺構分布図 …… 22
図２　長塚遺跡坪境溝SD-11平面図（S：1/200）及土層断面図（S：1/20） …… 24
図３　多遺跡（９次）検出遺構平面図及下ツ道との関係略図 …… 24
図４　矢部遺跡（１次、西野田地区）にみる素掘小溝長軸方向の転換 …… 25
図５　本庄・杉町遺跡（２次）旧河道護岸施設側面図（S：1/40） …… 26
図６　法貴寺遺跡環濠居館平面図 …… 26
図７　小阪里中遺跡（３次）環濠平面図 …… 27
図８　田原本町における溜池面積の推移 …… 28
図９　奈良盆地における条里制関連遺構消長概念図 …… 29
図10　奈良盆地南部の河川の集水と灌漑 …… 31
図11　昭和初期の奈良盆地における灌漑 …… 33
図12　奈良盆地における条里制の展開模式図 …… 34

表１　奈良盆地における条里制関連遺構一覧表１ …… 38
表２　〃　２ …… 39
表３　奈良盆地における条里制関連遺構消長表１ …… 40
表４　〃　２ …… 41

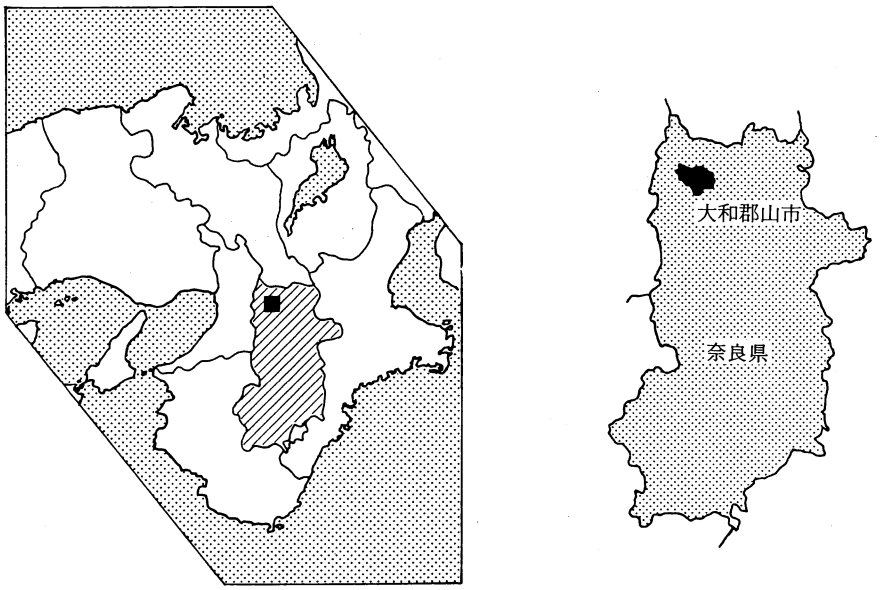


図１　大和郡山市の位置

Ⅰ　はじめに

今回の調査は、大和郡山市が平成２年度より実施している大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の一環として実施されたものである（平成４年度事業地分）。なお、今回の調査地は以前、当市教育委員会が報告した「高月遺跡」[1]の範囲内に含まれるため、今回の調査は「高月遺跡第４次調査」と称することとする。

試掘調査は平成４年８月20日～同９月４日にかけて行った。その結果、条里関連遺構（里境溝）と思われる遺構を検出したので、当該部位においてトレンチを拡張し、本調査を実施した。期間は平成４年９月７日～同10月16日、調査面積は約800㎡である。

図２　調査地点位置図（Ｓ：1/25,000）

II　調査の概要

1．層　　序（図３）

図３は、今回の調査区南壁の、溝SD-01を中心とした部分土層図である。該図によって明らかなように、調査地の堆積土層の様相はSD-01を境として大きく異なるものである。以下、図３に基づき、今回の調査地の層序について簡略に説明する。

⑩層は、SD-01の開削に先行すると思われる時期の耕作土層である（遺物等による具体的な時期は不明）。なお、⑦層も同様に、SD-01に先行ないしはそれと同時期の耕作土である（遺物等による具体的な時期は不明）。⑨層は、SD-01の上層（図５－ａ層）である（15世紀前葉）。ついで、③層、および⑥層は、SD-01埋没後の耕作土である（遺物等による時期は不明）。なお、両者間には顕著なレベル差、すなわち段差が認められる。また、⑤層についてはこの時期の畦畔の一部かと思われるものである。②層は、18世紀代の肥前磁器等を少量含む、「近世耕土層」である。なお、前時期に見られた畦畔および段差は引き続いてみられる。①層は、現代の耕作土である。畦畔は、同位置に見られるものの、段差についてはさほど明瞭ではなくなる。

なお、⑧層については、溝SD-01の堤状土盛と考えられるものである。ただし、今回の調査では大型重機によって面的に掘り下げたためか、該種施設を平面的に検出することはできなかった。また、調査地の北壁土層、並びに試掘時においても⑧層に対応する層は確認できなかった。このことについては、おそらく③層の時期（16世紀頃か？）の耕作でその大半が削平されたためと思われる。

2．遺　　構（図４）

〔SD-01〕

SD-01は、今回の調査で南北に約50mにわたって検出した溝状遺構である。方向性については、国土座標北に対し約３°東偏するものの、ほぼ南北を指向する直線的な遺構である。規模については、今回検出部分の南半以下では西方への拡張が認められ、該部では幅2.5～３m、拡張のない北半では幅約２mを測る。深さは約40cm（後述の「ｃ層」を含めると約50cm）である。

ついで、図５の土層模式図により、堆積土および出土遺物、時期などについて述べる。ｃ層は、SD-01の開削に伴う、いわば「掘り残し」とみられる層である。具体的には図６の④～⑦層などがこれにあたる。該層を整地層とみるか、より古段階の溝内堆積層とみるかについては、決定困難だが、図６―２などの該層の堆積状況をみる限りでは、それは前者、すなわち整地土としての可能性が高いものと考えられる。

ｃ層からの出土遺物は、図版４－１、２に示すように大半が瓦器椀（１～10）である。なお、これらは全て近江俊秀編年[2]のⅠ－７期、ないしはⅡ－１期に属する。すなわち、それによって与え

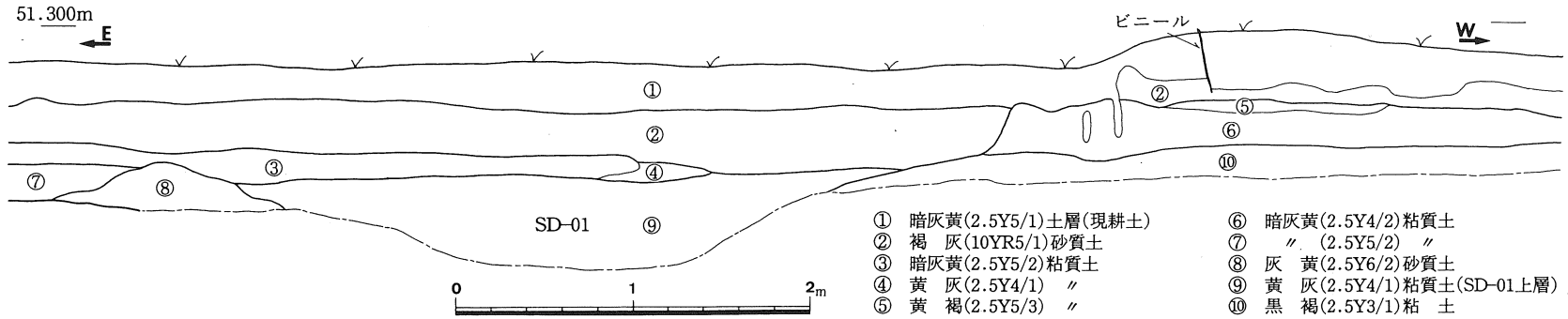


図3　調査区南壁土層図（部分　S：1/40）

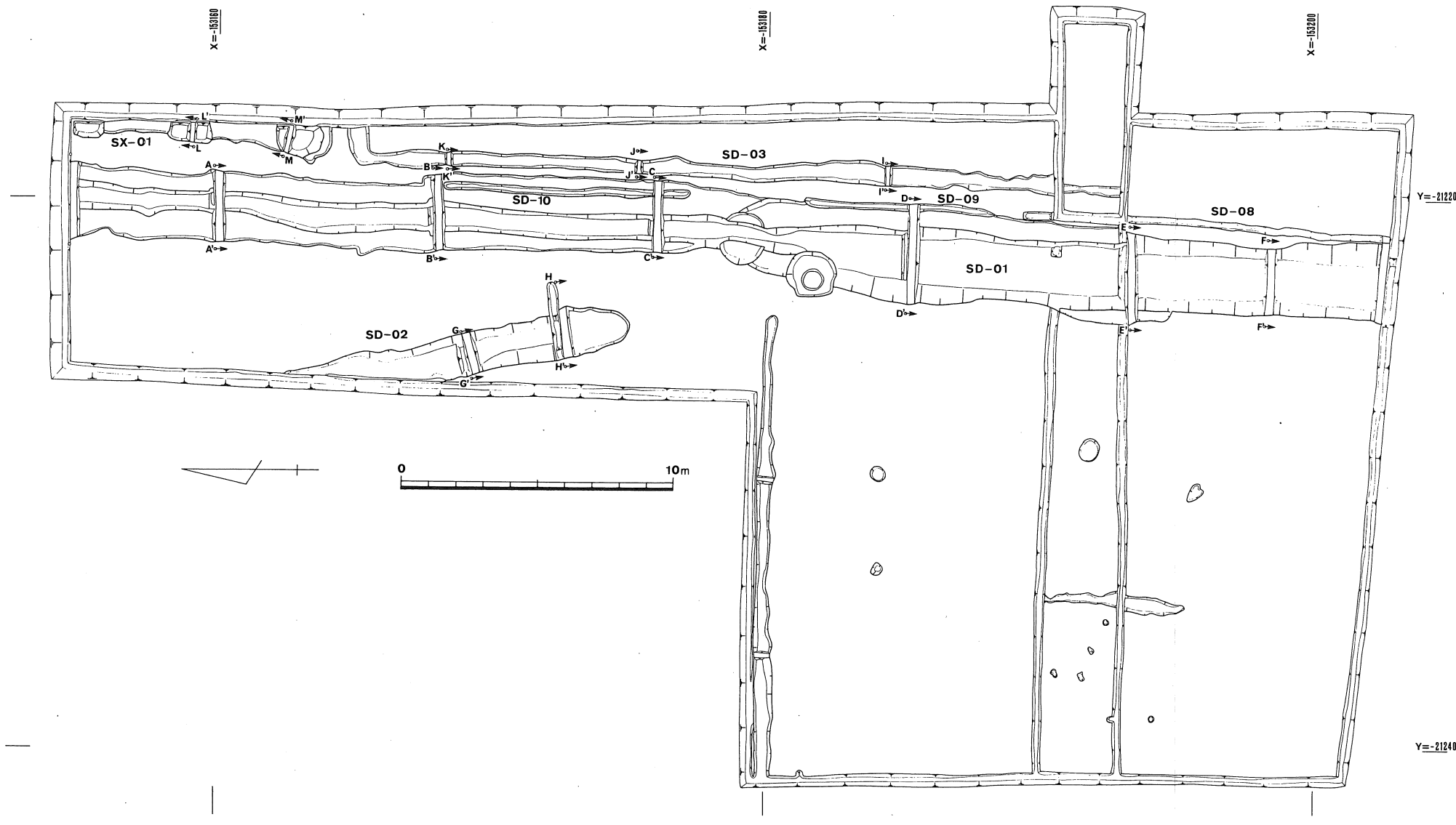


図4　検出遺構平面図（S：1/200）

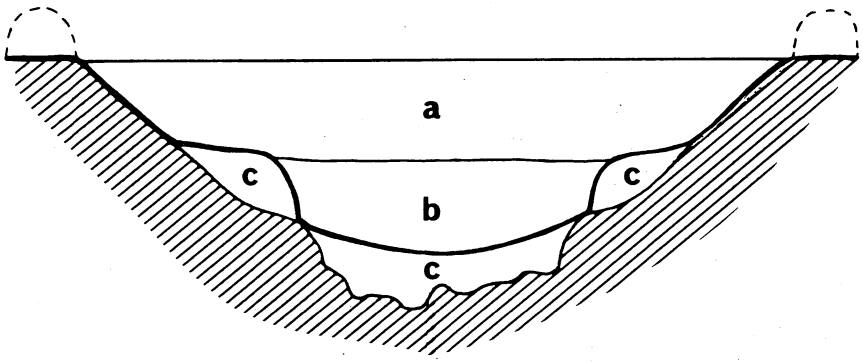


図5　SD-01堆積土層模式図

られる該層の形成年代はおおむね13世紀後葉である。なお、11は、常滑焼三筋壷のものと思われる口縁部破片である。赤羽一郎編年[3]のⅡ段階前半（13世紀前葉）に属する資料である。また12は、砂岩製の砥石である。

b層は、SD-01の、用水路としての機能に伴って形成されたと思われる層で、泥状の様相を呈する粘土層である。おそらく、滞水状態が主体を占める条件下で形成されたものであろう。具体的には、図6－③層などがこれにあたる。

出土遺物については、図版5－1、2にみられるようなものがある。瓦器椀（13、17～19）については、c層と同様、近江編年のⅡ－1期のものがみられるほか、同Ⅱ－3期のものが多見される。また、土師質土釜（15、16）や瓦質擂鉢（21、22）、同有窓鉢（14）等の在地系土器のほか、信楽焼擂鉢（24）や備前焼擂鉢（23）の破片もみられる。これらの出土遺物については、奈良町編年[4]のⅢ－B期前半に属するものである。すなわち、該層の下限年代は14世紀末と考えられる。

a層は、b層とは異なり、砂質を多く含む層であり、様相はむしろ耕作土等に似る。したがってその形成要因としては、滞水によるものではないものと思われる。すなわち、a層の形成期においては、SD-01はすでに用水路としての機能はほとんど喪失していたものと推定される。

出土遺物については、図版6－1、2にみるようなものがある。瓦質擂鉢（25～31）、同鉢（32）、土師質土釜（37、38）、土師皿（39、40）、備前焼擂鉢（33）、東播系須恵器甕（34）、および砥石（41）等の破片がみられ、瓦器椀はみられない。これらの出土遺物については奈良町Ⅲ－B期後半に属するものと思われる。すなわち、該層の下限年代は15世紀前葉として捉えられる。

図7は、SD-01の機能的変遷を、叙上の検討を基に模式図化したものである。以下、該図によってSD-01の「変遷」を述べてみたい。

13世紀後葉にこの溝は開削され（①）、おそらく若干の整地が行われる（②）。そして、溝は耕地の用排水路としての機能を終える。その後においては、この溝は水路として積極的に機能したものとは考えられず、おそらくは、一時的に排水路的な機能を荷う程度の「地割り」として残るが、そ

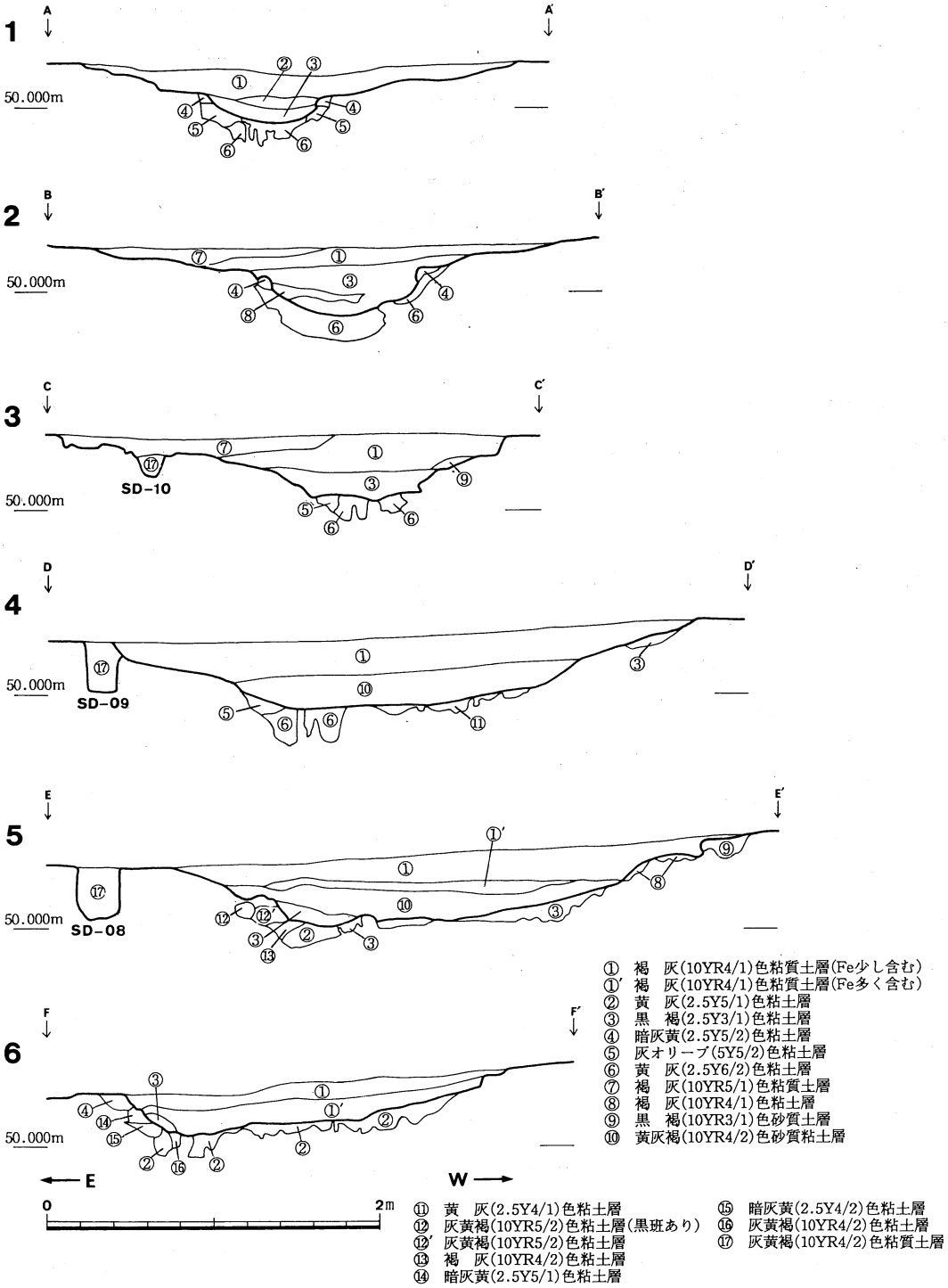


図6　SD-01土層断面図（北より　S：1/40）

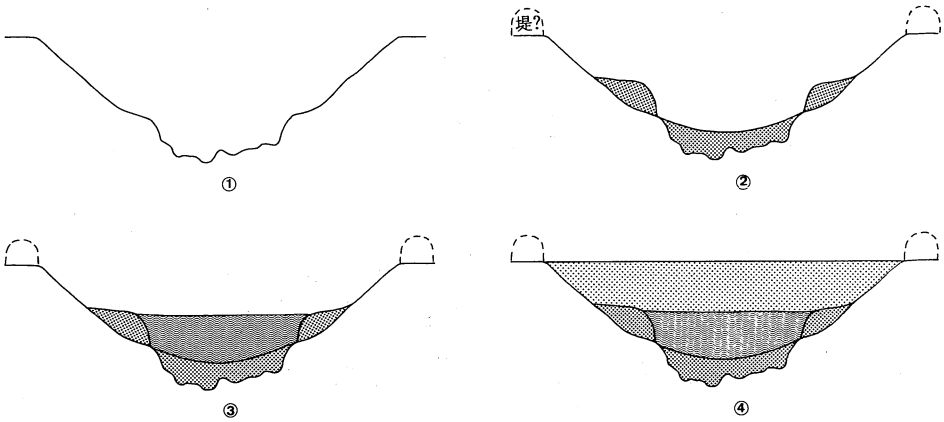


図7　SD-01変遷模式図

れも15世紀前葉には完全に埋没する（④）。なお、この溝（SD-01）の具体的な「性格」については、Ⅲ章で触れたい。

〔SD-08，09，10〕

SD-08，09，10は、いずれもSD-01の東側辺に接して検出された溝状遺構である。それらは断続的に南北へ伸びるもので、南からSD-08、同09、同10と称することとする。規模については、幅はいずれも約20cm、深さは同じく約30cmを測る。長さについては、SD-08が14m以上、SD-09が約7m、SD-10が約9mを測る。なお、これらの溝の断面形状については図6にみるように、整った長方形状を呈し、素掘りの状態では用水路としての機能は難しい（滞水した場合、側壁が容易に崩落する）。したがって、これらの遺構については、何らかの施設（木樋等）の埋置を前提としたものとして捉えられよう。なお、溝は人為的に埋め戻された状態であった。また、溝の時期については、図6－4に示されるように、SD-01の①層（図5－a層）より先行することは確実である。ただし、遺物が出土しなかったため、詳細な時期については不明である。なお、これらの溝の機能については、不明とせざるを得ないが、あえて推定するならば、これらはSD-01が水路として機能していた時期（図7－③）、それに付随して何らかの役割を荷ったものと考えられる。

〔SD-02〕

SD-02は、SD-01の西方で検出された、斜行する溝状遺構である。幅は1.5～2m、深さは約25cmを測る。この遺構は、その視認される顕著な特徴として、堆積土中に黄褐色の地山粘土ブロックを多量に含んでおり（図版3－6）、この遺構が人為的に埋め戻されたことを明瞭に示している。なお、SD-02の時期については、出土遺物がごく微細な瓦器椀破片に限られたため、明らかにすることはできない。また、その性格についても全く不明である。

〔SD-03〕

SD-03は、SD-01に東隣し、南北に伸びる浅い溝状遺構である。なお、この遺構はその北辺で東

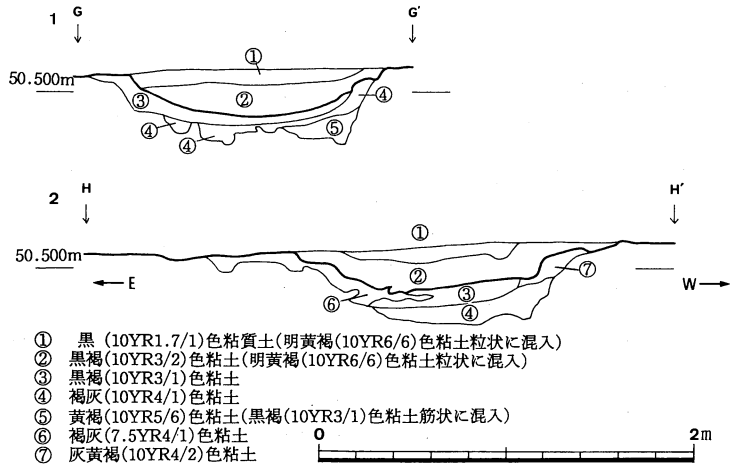


図8　SD-02土層断面図（北より　S：1/40）

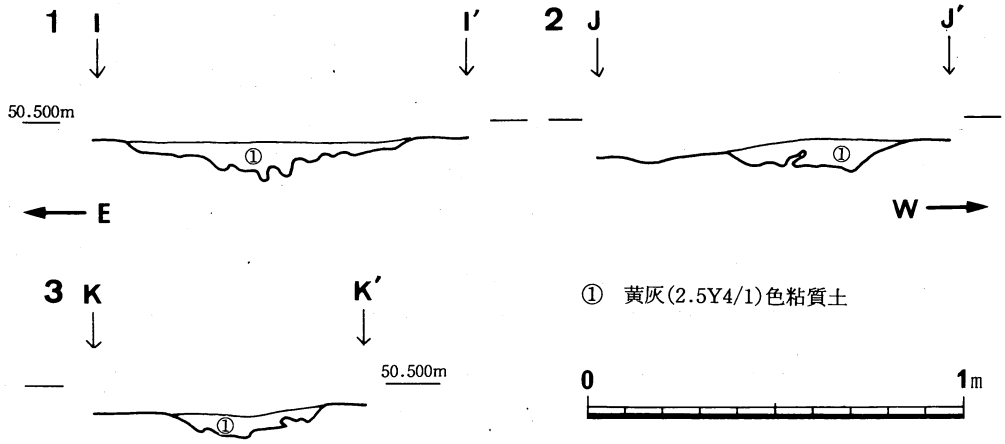


図9　SD-03土層断面図（北より　S：1/20）

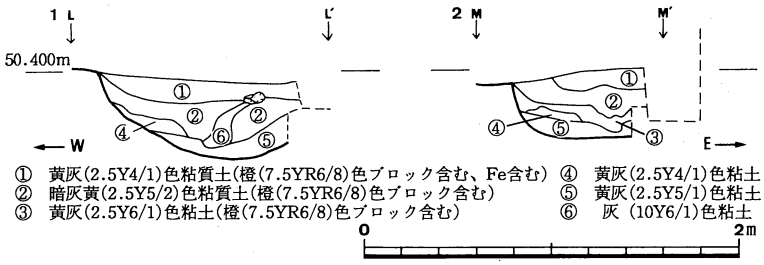


図10　SX-01土層断面図（南より　S：1/40）

に直角に折れ曲がる。幅は約50cm、深さは約10cmを測る（ただし、本遺構は実際には図３－③層より掘り込まれているので、本来の規模は深度、幅ともにそれぞれ数cm上乗せした値となる）。なお、堆積土については一層に限られ、その状況から推して水路として長期間機能したものとは思われない。

出土遺物には図版７－１に示すものがある。瀬戸・美濃焼陶器折縁皿（44）や瓦質擂鉢（42、43）等がみられる。これらの遺物より推定されるSD-03の埋没年代は16世紀後葉である。

〔SX-01〕

SX-01は、SD-03の北で検出された、特異な様相を持つ遺構である。浅い落ち込みの内に３ケ所、深い（約40cm）方形土坑がみられる。本遺構の性格については、その東側が調査区外であったため、明らかにはできないが、何らかの灌漑施設であったものとは推定できる。なお、こうした遺構の類例として、奈良県内では、田原本町多遺跡（第10次）[5]の「土坑状の掘り方」や斑鳩町目安遺跡[6]の「方形土坑群」があげられ、調査者は共に、その用途について「畑作に伴うもの」とする意見を提出している。

出土遺物については、図版７－２に示すものがある。瓦質擂鉢（45、46）、瀬戸・美濃焼陶器片（48）、および砥石（49）がみられ、それらの示す年代は16世紀後葉である。

Ⅲ　ま と め

図11は、今回の調査地周辺の復元条里図である。該図において、添下郡京南６条４里と５里の境をなす里道は、南に対して東へと大きく偏するものである。すなわち、本来の里境は現在の里道より若干西によるものと推定され、それは今回の調査によって検出されたSD-01の走行ラインに適合する。したがって、SD-01は本来の添下郡京南６条４里と５里の里境遺構（溝）として捉えることができる遺構である。

SD-01が開削されたのは、13世紀後葉であり、14世紀末には水路としての機能を終える。また、15世紀前葉には完全に埋没する。奈良盆地においては、Ⅴ章の考察編にみるように、13世紀頃に開削、ないしは造成される坪（条・里）境遺構がきわめて多く、今回のSD-01も、それらの類例としてカウントされることとなる。ただし、今回の調査の場合、他の調査例に比してその変遷や時期について、堆積土層や出土遺物を基としたデーターをより具体的に呈示できた。このことは、奈良盆地の条里制の展開に関する問題を考える上で重要な意味を持つものと考える。また、SD-01が本来持っていたであろう取排水のシステム（井堰等）は、今回の調査域内では検出することができなかったが、これについては周辺の調査によって、近年中に明らかにする機会があるだろう。

本報告書の作成に関し、下記の方々より貴重な御教示を得ました。末尾となり恐縮ですが、記して感謝の意を表します（五十音順。敬称略）。

足利健亮、今尾文昭、近江俊秀、北野隆亮、立石堅志、寺沢薫、松本洋明、山中敏史、和田萃。

〈注〉

(1) 山川均『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会　1991

(2) 近江俊秀「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』43-10　古代学協会　1991

(3) 赤羽一郎『常滑焼』ニューサイエンス社　1984

(4) 立石堅志「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会　1989

(5) 寺沢薫「多遺跡第10次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度　奈良県立橿原考古学研究所　1989

(6) 長谷川俊幸「目安遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度　奈良県立橿原考古学研究所　1983

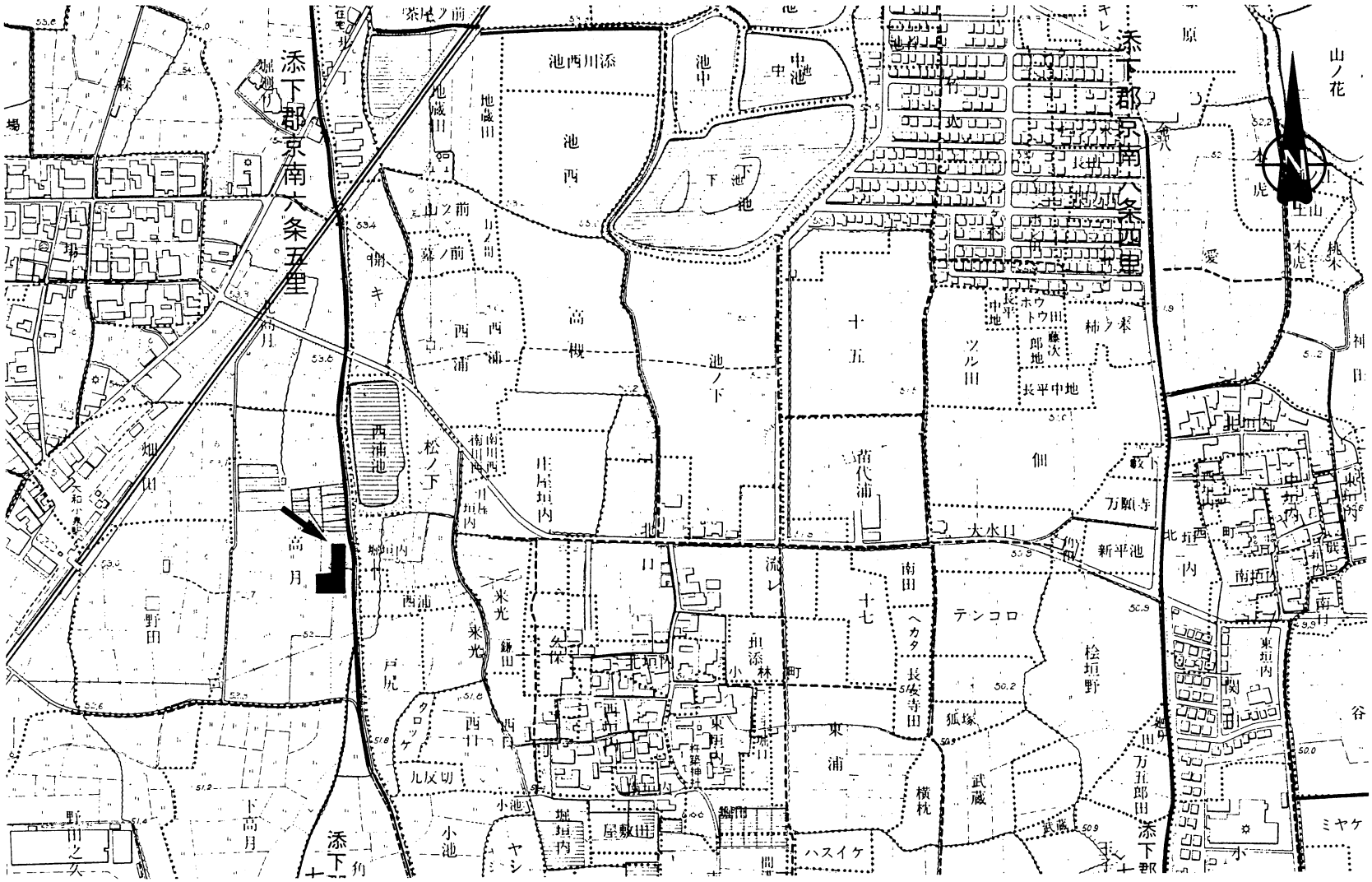


図11　調査地周辺の復元条里（矢印が今回の調査地。『大和国条里復元図』No．39・40より。S：1/5,000）

Ⅳ　高月遺跡４次調査の花粉分析と農耕について

天理大学附属天理参考館　金原　正明
環境文化研究所　金原　正子

１．はじめに

中近世の農耕は、わかっているようであまりわかっていない。特に畑作に関しては情報も少ない。自然科学的手法での調査例は少なく、奈良盆地ならず近畿地方をみても、筆者の行った箸尾遺跡などがわずかに報告されているだけである。高月遺跡４次調査では中世の農耕にともなう溝があり、その中の堆積土が花粉分析可能であった。ここではその花粉分析結果を報告し、若干の考察を加える。なお、試料の時期などは、現場で試料採取した際、調査を担当された山川均氏の教示によるものである。

２．試　料

試料はＳＤ－01のNo.３横断土層面から採取した。試料採取位置は図12に示す。試料と堆積物は灰色から褐色を呈するシルト・粘土を主とする堆積層のもので、著しい葉理はみられず、比較的穏やかな流れで堆積したものとみられる。上部となる試料１では上位からの土壌生成作用のため、土壌化が著しく堆積構造が鮮明でなく、土壌構造がやや発達している。試料の時期は試料１で15世紀前半、試料２で14世紀後半、試料３で13世紀後半である。いずれも出土土器からであり、下限の時期である。試料４は遺跡のベースとなるよくしまった黄灰色のシルト・粘土で、更新統の可能性が高いと考えられる。念のために採取した。なお、試料はブロック状に切りとって採取した。

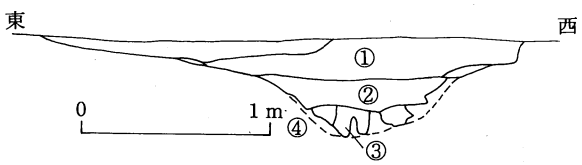


図12　ＳＤ－01　No.３横断土層図

３．花粉分析の方法

分析は持ち帰ったブロック試料の内部の新鮮な部分を用いて行った。分析方法は以下の順に物理科学処理をした。

１）試料を遠沈管に取り、５％水酸化カリウム溶液を加えかき混ぜ、15分間湯煎する。
２）0.5㎜の篩で大きな粒子を取り除く。
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて湯煎した後、30分放置する。
４）氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。
５）再び氷酢酸で処理を行う。
６）残渣に石炭酸フクシン染色を行う。
７）適量のグリセリンゼリーを加え暖めて、プレパラートを作製する。

以上の操作間は、水を加え撹拌し1500rpmで２分遠心分離し上澄を捨てる水洗操作を３・４回繰り返す。

８）作成したプレパラートを200倍から900倍で鏡検する。計数は、花粉粒が200～300個以上になるまで行った。

４．結　果

試料４は花粉粒がほとんど検出されなかったが、他は良好な結果を得た。花粉遺体の検出結果は表に一覧する。検出された分類群は以下に示す樹木花粉21、樹木・草本とも含むもの２、草本花粉16、シダ植物胞子２の計41の種類である。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリーシイ属ーマテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、サンショウ属、モチノキ属、トチノキ、カキノキ属

〔樹木・草本とも含む花粉〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、タデ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、シソ科、タンポポ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

なお、分析結果は花粉総数とする百分率を算定し、花粉組成図に表した。

花粉の検出された試料１～３は、ほぼ同じ傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子は少ない。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が多く、他にマツ属複維管束亜属・ハンノキ属・クリーシイ属ーマテバシイ属・コナラ属アカガシ亜属が出現する。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占しオモダカ属・カヤツリグサ科・ソバ属・アブラナ科・アリノトウグサ属ーフサモ属・キク亜科・ヨモギ属が出現する。

５．考　察

花粉分析から農耕や植生を復原する場合、分類群による出現特性を考慮しなければならない。花粉分析において花粉生産量の多い風媒花の植物は遠方まで飛びそして過大にあらわれる。虫媒花や自家受粉花の植物は花粉生産量が著しく少なく、移動も限られてくるので少量でも大きく評価されなければならない。特に後者の植物は花粉が検出されなかったからといって存在を否定されるものではない。以下、これらのことを加味しつつ植生と農耕を復原考察する。

分類群		試料			
学名	和名	1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
Tsuga	ツガ属	1	2		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	17	12	7	
Sciadopitys	コウヤマキ	7	3	3	
Cryptomeria	スギ	5	12	7	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科		2	3	
Myrica	ヤマモモ属			1	
Pterocarya	サワグルミ属			1	
Alnus	ハンノキ属	7	24	3	
Betula	カバノキ属			7	
Corylus	ハシバミ属	3		2	
Carpinus-Ostrya	クマシデ属ーアサダ	2	5	4	
Castanea-Castanopsis-Pasania	クリーシイ属ーマテバシイ属	14	9	31	
Fagus	ブナ属		1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	36	58	41	4
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	14	13	26	1
Ulmus-Zelkova	ニレ属ーケヤキ	1	2		
Celtis-Aphananthe	エノキ属ームクノキ	1	1	8	
Zanthoxylum	サンショウ属			1	
Ilex	モチノキ属		4		
Aesculus	トチノキ			1	
Diospyros	カキノキ属			1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科ーイラクサ科	4	2	7	
Rosaceae	バラ科			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Sagittaria	オモダカ属	9	2	5	
Gramineae	イネ科	124	122	133	1
Oryza type	イネ属型	46	44	36	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	16	13	22	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	3			
Polygonum	タデ属	2			
Fagopyrum	ソバ属	14	9	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	1	3	2	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	1		
Cruciferae	アブラナ科	14	5	3	
Umbelliferae	セリ科	3	1	1	
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	5	6	17	
Labiatae	シソ科	1			
Lactucoideae	タンポポ亜科	5	14	9	
Asteroideae	キク亜科	10	22	23	1
Artemisia	ヨモギ属	13	19	31	2
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	10	12	19	2
Trilate type spore	三条溝胞子	28	12	8	
Arboreal pollen	樹木花粉	108	148	147	5
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	4	2	9	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	267	261	284	4
Total pollen	花粉総数	379	411	440	9
Unknown pollen	未同定花粉	4	2	3	
Fern spore	シダ植物胞子	38	24	27	2

花粉遺体一覧

樹木花粉では、その占める割合も少なく、風媒花の樹木がほとんどであるため、周囲の丘陵山地から飛来した花粉とみなされる。コナラ属コナラ亜属とハンノキ属が目立ち、これらは自然林が破壊された後に入り込み途中相の二次的な樹木であるコナラやヤシャブシと考えられよう。よって、周囲の丘陵山地の自然林は大きく破壊されていた。奈良盆地内の同じ中世の箸尾遺跡ではコナラ属アカガシ亜属とマツ属複維管束亜属・スギが多く、想定される森林要素の様相が異なる。このことは丘陵山地の土地利用が小地域において異なることを示す。明らかな有用樹木として花粉がわずか１個ではあるがカキノキ属が検出された。

草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が多く、周囲に水田が広がっていたとみなされる。しかし、畑作植物であるソバ属と畑作植物を含むとアブラナ科の花粉が出現している。ソバ花粉は１％以上の検出でかなり大規模な栽培とみなすことができるため（中村1981）、ここでは大規模な畑作が想定される。他にもタンポポ亜科・キク亜科・ヨモギ属の乾燥した畑地や人里を好むキク科の花粉も多く出現しており矛盾しない。以上のように高月遺跡では水田に加え、畑地が分布している。畑作の栽培植物は花粉分析ではソバ属が確実で、他にはアブラナ科とカキノキ属そしてクワ科が可能性として上げられる。金原・粉川・寺沢（1992）によると、花粉分析とプラント・オパール分析では畑作要素がほとんど反映されず、種実遺体に大きくあらわれる。箸尾遺跡ではクワ・ツルコウゾ・ウルシ属・モモ・スモモ・ナシ・カキ・ムギ類・ナス・ソバ・ウリ類・ゴボウの畑作栽培植物の種実が検出されており、高月遺跡でもほぼ同様の畑作が大規模に行われていたと想定されよう。

高月遺跡のような低地の遺跡において水田と畑がどのような形態で存在していたのかという問題があるが、畑は地力の維持が難しくまた連作障害もおこるため、恒常的に畑に使用するのではなく、一定の周期で畑から田、田から畑へと繰り返す田畑輪換の形態であったとみるのが妥当であろう。

なお、寄生虫卵の観察も行ったが検出されなかった。このことからまだ資料が少ないものの、中世の人糞施肥を積極的に示唆できない可能性があると考えられる。

参考文献

中村純（1981）「農耕史の花粉分析学的研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学昭和55年度年次報告書』

金原正明（1988）「箸尾遺跡第５次調査の花粉分析」『奈良県遺跡調査概報1987年度　箸尾遺跡第５次調査概報』

金原正明・粉川昭平・寺沢薫（1992）「植物遺体による畑作の解析」『日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集』

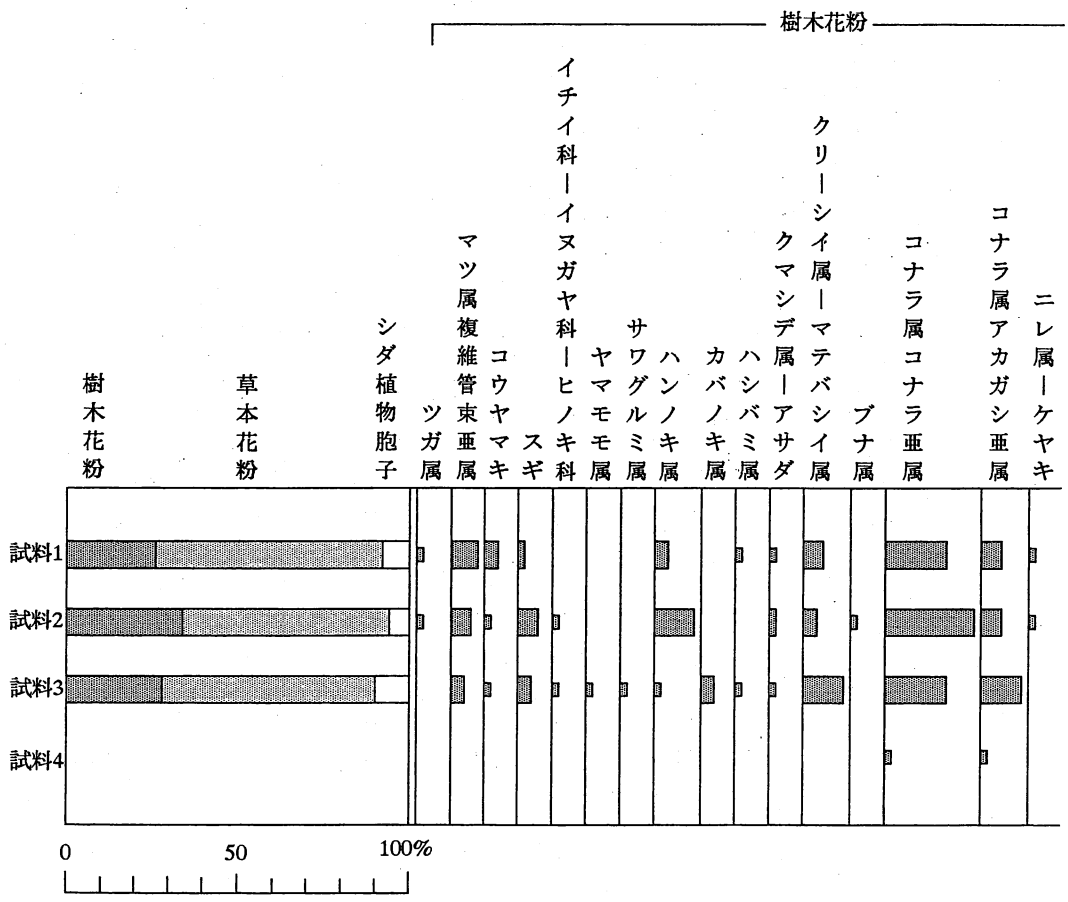
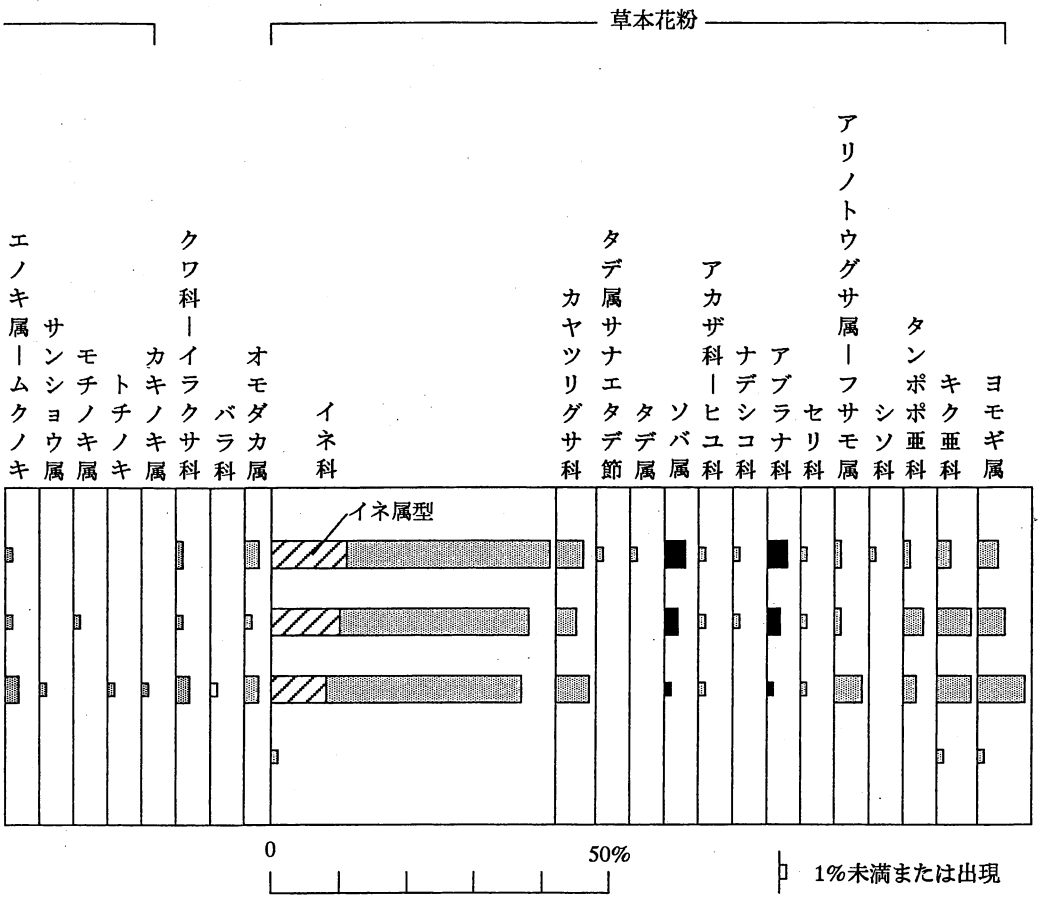
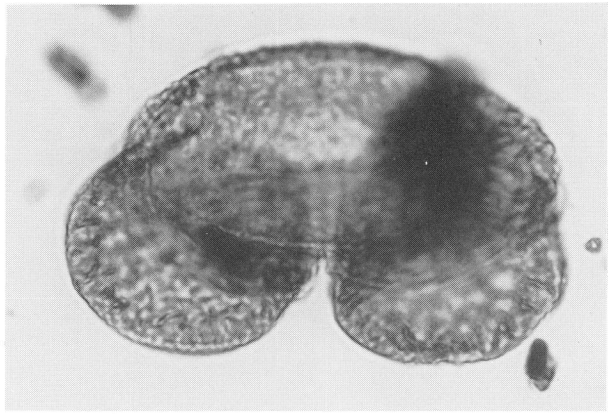

樹木花粉
ニレ属－ケヤキ
コナラ属アカガシ亜属
コナラ属コナラ亜属
ブナ属
クリ－シイ属－マテバシイ属
クマシデ属－アサダ
ハシバミ属
カバノキ属
ハンノキ属
サワグルミ属
ヤマモモ属
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科
スギ
コウヤマキ
マツ属複維管束亜属
ツガ属
シダ植物胞子
草本花粉
樹木花粉
試料1
試料2
試料3
試料4
0
50
100%

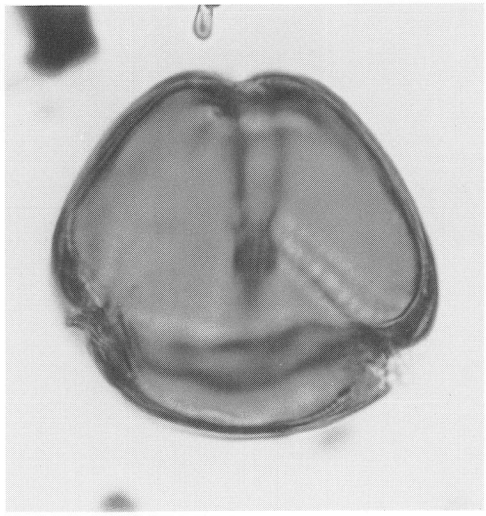
図13 花粉組成図


草本花粉
エノキ属ームクノキ
サンショウ属
モチノキ属
トチノキ
カキノキ属
クワ科ーイラクサ科
バラ科
オモダカ属
イネ科
カヤツリグサ科
タデ属サナエタデ節
タデ属
ソバ属
アカザ科ーヒユ科
ナデシコ科
アブラナ科
セリ科
アリノトウグサ属ーフサモ属
シソ科
タンポポ亜科
キク亜科
ヨモギ属
イネ属型
0
50%
1%未満または出現



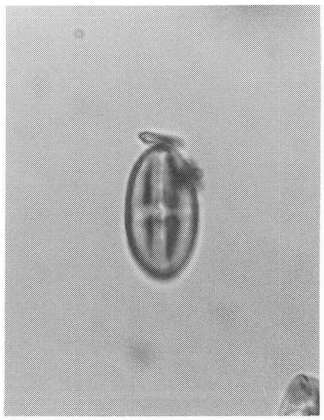
1．マツ属複維管束亜属

2．スギ

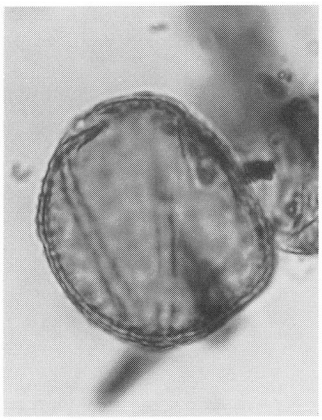


3．カキノキ属

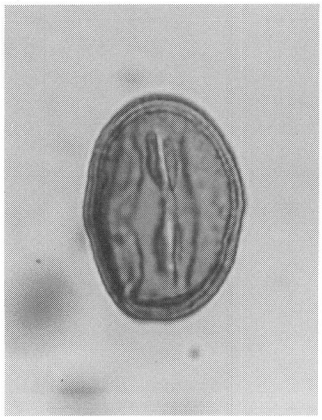
4．同左



5．クリーシイ属ーマテバシイ属



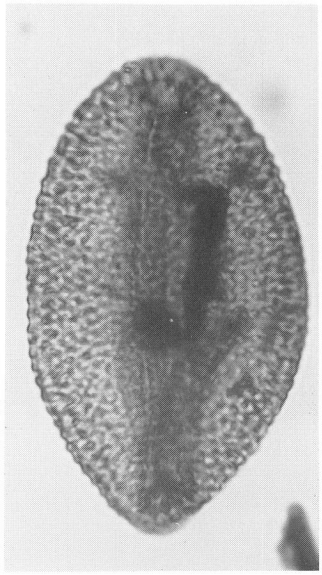
6．コナラ亜属



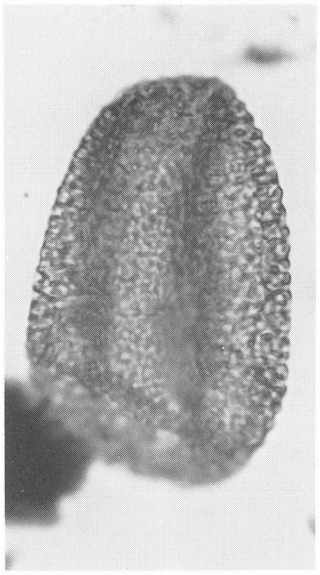
7．アカガシ亜属

30μ

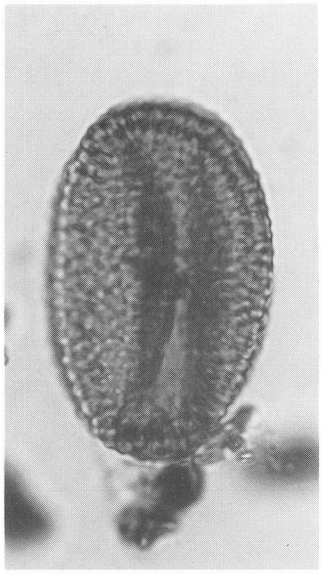
写真1　花粉顕微鏡写真1



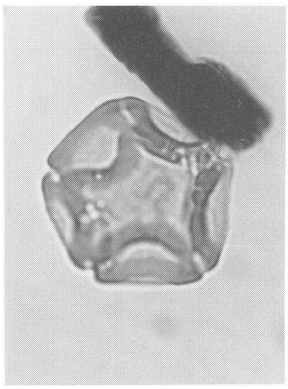
8．ソバ属



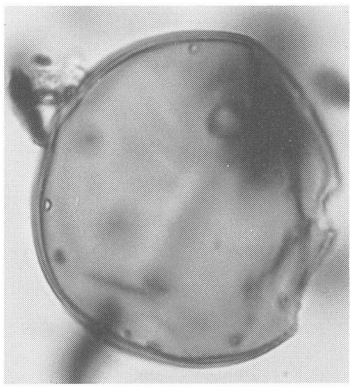
9．ソバ属



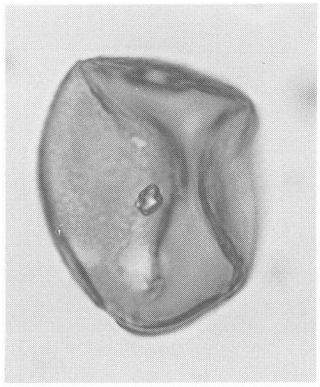
10．ソバ属



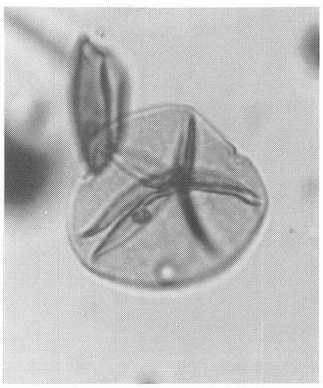
11．ハンノキ属



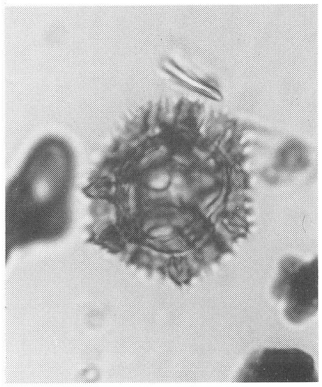
12．イネ属型



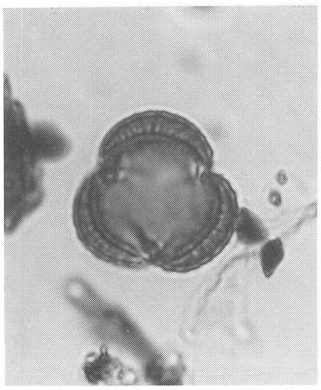
13．イネ科



14．クワ科―イラクワ科



15．タンポポ亜科



16．ヨモギ属

30μ

写真2　花粉顕微鏡写真2

V　考察編

奈良盆地における条里制

― 発掘資料にみるその展開 ―

奈良盆地の現在の条里景観（大和郡山市域。中心が下ツ道。南より）

奈良盆地における条里制

― 発掘資料にみるその展開 ―

Ⅰ　はじめに

本稿は、奈良盆地における条里制関連遺構に関し、現在その様相が比較的明らかなものについての資料の集成を行い、主としてそれらの時期問題（消長）に関して検討を実施した上で、該地の条里制の展開について若干の考察を行うものである。

奈良盆地における条里制の起源ないしは展開について、考古学的見地より検討を試みたものとしては、中井一夫の先駆的業績があり[1]、かつ寺沢薫による詳細な研究がある[2]。本稿ではそうした先学のすぐれた研究を基に、今回条里制関連遺構の集成に基く知見を加え、奈良盆地における条里制の展開について、総括的な叙述を試みてみたいと思う。

Ⅱ　遺構各説 － 奈良盆地における条里制関連遺構の概要

1．本稿で取り扱う遺構の種別について

本稿では、「条里制関連遺構」として、今回以下の７種を取り扱う。

(1)　水田遺構

水田遺構そのものが耕作土も含めて検出されている場合と、畦畔のみの検出の場合がある。

(2)　坪（条・里）境遺構

通常、「坪境溝」などの名称で知られる遺構のうち、発掘調査によってその年代が判明しているものを取り扱う。

(3)　素掘小溝

いわゆる「中世素掘溝」などの名称で知られる耕作関連遺構である。幅20～30㎝、深さ10㎝未満のものが普通である。奈良盆地ではこの種の遺構の検出例はきわめて多いが、本稿ではそのうち完形土器などにより時期が比較的明瞭に判明しているものを取り扱う。

(4)　旧 河 道

ここでいう「旧河道」は、基本的に奈良盆地内をかつて網流ないしは曲流していた自然河道を指す。したがってここでは下ツ道側溝などの明らかな人工河川は除いた。

(5)　環濠居館

通常 1/4 坪を幅３～４ｍの大溝（環濠）で囲繞した屋敷地を指す。これは(6)の環濠集落と一見似た様相を呈するが、環濠居館はその規模ないしは形態が現在の奈良盆地の農村には全く反映しないこと、また規模が環濠集落に比べ明らかに小さいことから両者の峻別は容易である。

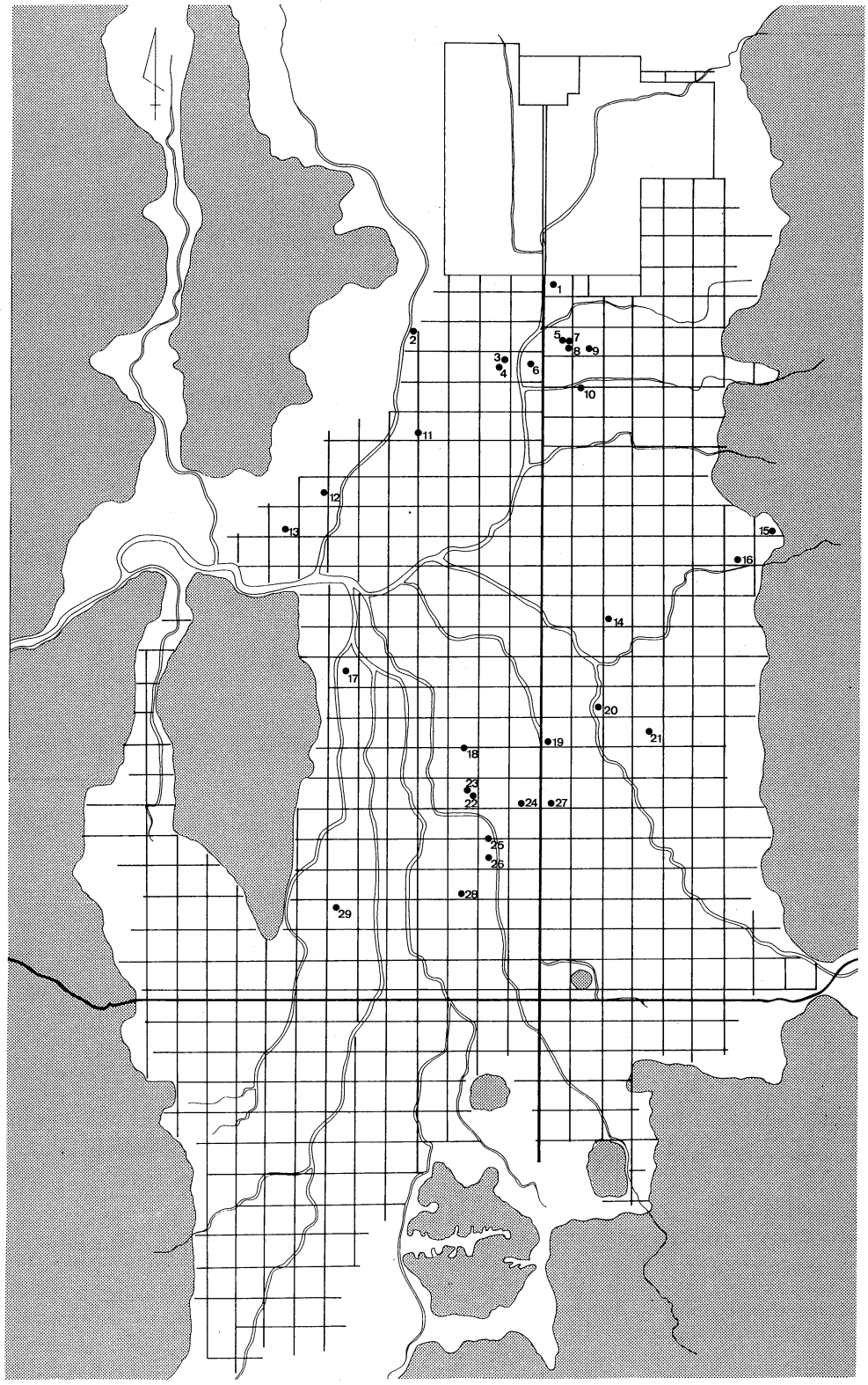


図1　奈良盆地における条里制関連遺構分布図

(6) 環濠集落

通常1坪以上を占地する、環濠によって囲繞された集落を指す。奈良盆地では現在の農村自体にこの形態を取るものが多いが、そうしたものについては発掘調査は行われていない。ただし、現行のもの以外に、現在の村落の周辺等より埋没した環濠が発掘調査によって検出されている事例があり、本稿ではそれを取り扱うこととする。

(7) 溜地・河川堤体

条里形地割とともに現在の奈良盆地の景観を規定しているものとして、いわゆる「皿池」と呼ばれる条里に適合する溜池、および高い堤防によって仕切られる直線的な河川がある。本稿ではそうしたもののうち、発掘調査によって年代の判明しているものを主に取り扱う。

2．各種別にみた条里制関連遺構の概要

本稿で抽出した条里制関連遺構は表1、2に示す計29遺跡である。なお、それぞれの位置については図1に示す通りである。該図においてドットの集中を示すのは現在の大和郡山市域と田原本町域であるが、むろんそれは調査地の多寡、広狭、ないしは調査担当者の問題意識に由来する現象であって、本来の条里形地割とは何ら関連しない事項である。

3．条里制関連遺構の消長について

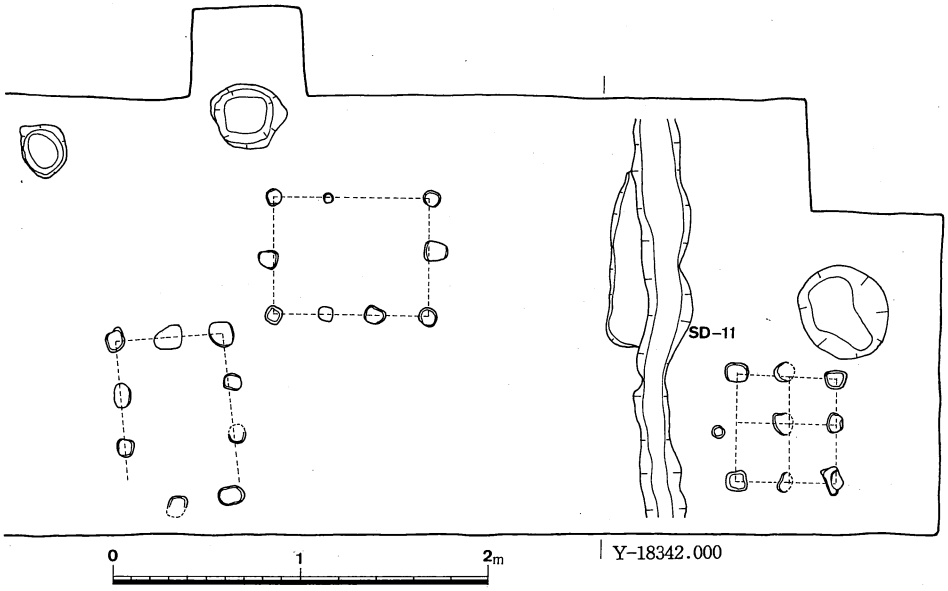
表3、4は、表1、2の条里制関連遺構を本章1項の種別に基づいて分類し、各種別毎にその消長をあらわしたものである。以下、種別毎にその概略について記述する。

(1) 水田遺構

現在、奈良盆地で確認された最古の条里形水田は、池尻（図1－29。表も同番。以下各遺跡これに同じ）のものである。ここでは合計3面の水田面が確認されており、古い方より水田1面（8世紀末）、同2面（9世紀）、同3面（10世紀）の年代が与えられている。なお、ここの最古の水田面（1面）の年代は耕土中に含まれた土器によって決定している。

箸尾（17）では0期（10世紀末～12世紀）、Ⅰ期（12世紀後葉～13世紀中葉）、Ⅱ期（13世紀中葉～14世紀後葉）、Ⅲ期以降（14世紀後葉～）の各水田が確認されている。同遺跡の水田面について寺沢の綿密な検討があり、詳細はそれによられたいが、ここで注目しておきたいのはⅡ期以降の耕地開発が微高地にまで及んだ、とする指摘である。寺沢はその表徴として溜井と島畠の登場を挙げており、該期（Ⅱ期）を「現代の田畠の景観形成期」と規定している。なお、寺沢は箸尾ないし後述の多の耕作関連遺構の検討を通じて、11世紀と13世紀を「耕地開発の2つの画期」として捉えている[3)]。この点については、後記するように本稿においても同調する部分が多い。

多10次（25）における水田調査もまた、寺沢の業績である。寺沢はここでの水田の時間を0期（12世紀初頭～13世紀初頭）、Ⅰ期（13初頭～同前葉）、Ⅱ期（14世紀中葉～16世紀中葉）、Ⅲ期



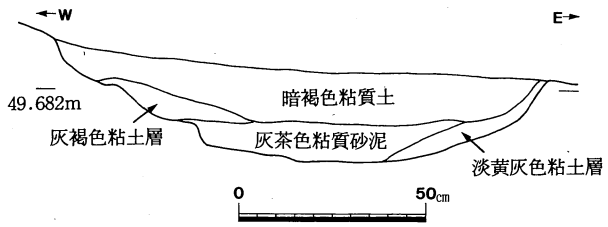


図２　長塚遺跡坪境溝SD-11平面図（Ｓ：1/200）及土層断面図（Ｓ：1/20）

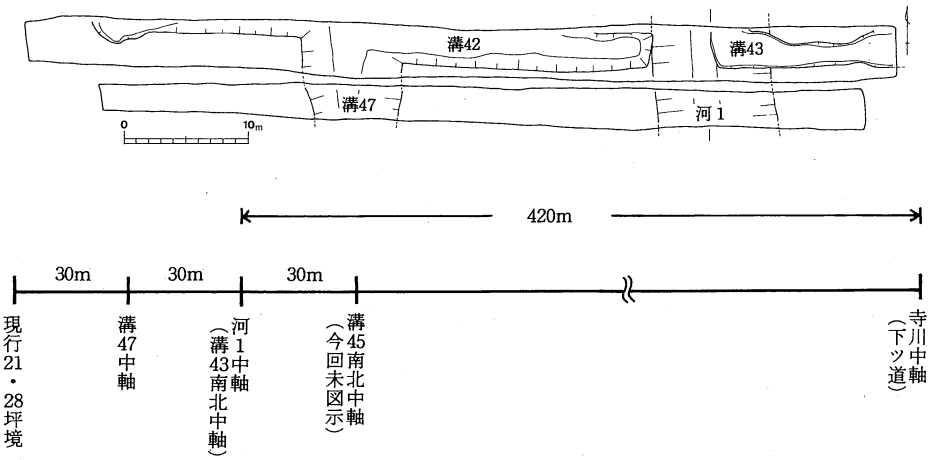


図３　多遺跡（９次）検出遺構平面図及下ツ道との関係略図
（遺構平面図については文献㉘を再トレース）

(近世初頭)、Ⅳ期（近世末～現代）としている。

(2) 坪（条・里）境遺構

奈良盆地で現在最古例とできる坪境遺構は、長塚(1)における溝SD-11（８世紀前～中葉）である（図２）。ただ、ここでは該期の耕作関連遺構ないしは耕作土は確認されていない。また、SD-11の西方には８世紀後葉の溝SD-14があり、これは自然地形に沿い斜向している。

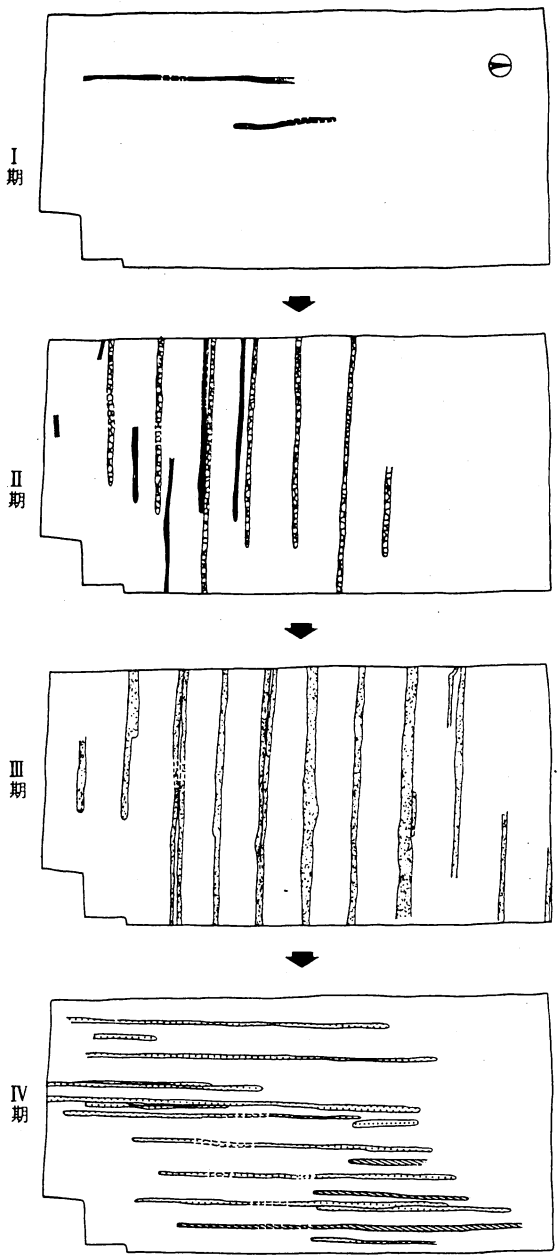


図４　矢部遺跡（１次、西野田地区）にみる素掘小溝長軸方向の転換（文献㉕より）

ついで、海知（21）において検出された溝（８世紀後葉）は、18世紀後葉～近代にかけての坪境溝と隣接して検出されたものである。ここでも先の長塚と同様、東方には奈良～平安時代にかけての斜向する溝（道？）が検出されている。なお、長塚、海知の斜向する地割遺構は、いずれも正向地割遺構の埋没後に現れるものである点は注目される。

多９次（26）において検出された河１は、現在の条里坪境には適合しないものの、下ツ道中軸とされる寺川より西方約420ｍを南北に通じていたと思われるものである（図３）。時期は７～８世紀。調査面積が南北にはごく狭いため断定はできないが、あるいはこれが条里制の施行当初、何らかの地割として機能（自然河道を整流したものか？）したものかもしれない。

箸尾（17）における坪境遺構は、１次調査で検出された道（SD-111、113）が10世紀のもので、ここでは最古例となる。他のものではSD-111等が10世紀末より機能したものと思われるが、中心となる年代については11世紀以降である。

多10次（25）では、坪境溝の初現は12世紀以降となる。なお、多９次では溝42、43がやはり12世紀には機能していた。また、

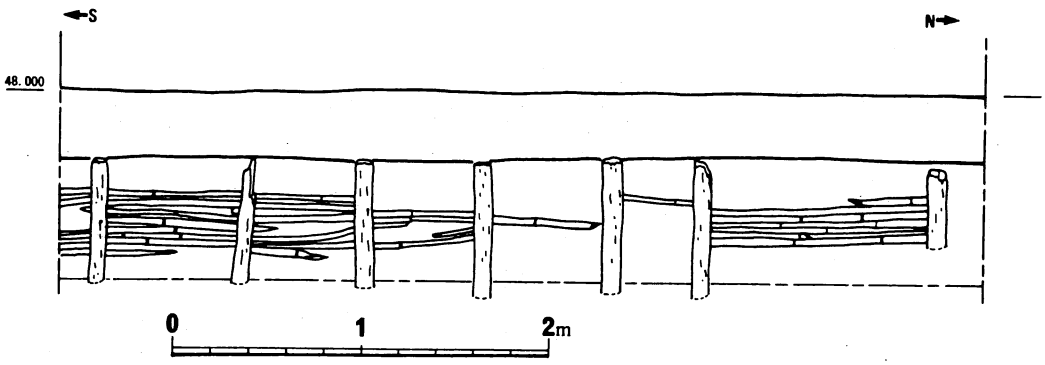


図５　本庄・杉町遺跡（２次）旧河道護岸施設側面図（Ｓ：1/40）
（文献③より）

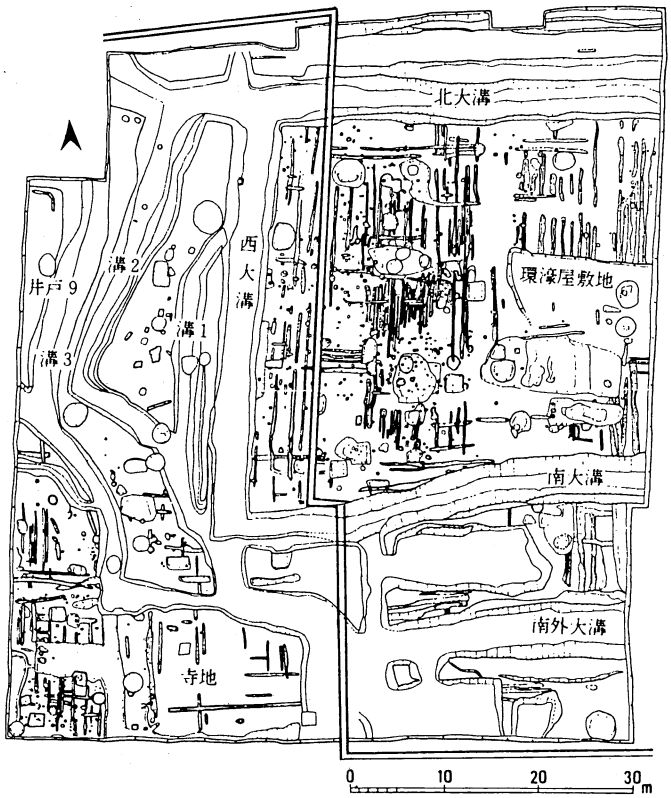


図６　法貴寺遺跡環濠居館平面図
（『中世土器の基礎研究Ⅵ』1990より）

ここで注意したいのは溝43の南北方向が先の河１の中軸ラインに適合している点である（図３参照）。

(3) 素掘小溝

完形土器の出土によって、その機能年代が判明する例としては阪手（27）や小阪里中（19）の素掘小溝がある。ここではいずれも完形瓦器椀や土師皿が出土しており[4]、それらの示す年代はいずれも13世紀初頭である。

多10次（25）では、７～10世紀にかけての素掘小溝は約45°斜向していた。正向のものは13世紀末より見られ、一部（十市郡路西19条２里17坪）において顕著に認められている。その方向は当初南北長軸、後に東西長軸に変更（現在は東西長軸の長地形）されている。

こうした素掘小溝の長軸方向の転換、すなわち水田自体の長軸方向の転換は、特に矢部１次（23）において顕著に観察されている（図４）。ここでは判明しているだけでⅠ期（南北）、Ⅱ期（東西）、Ⅲ期（南北）、Ⅳ期（東西）の素掘小溝長軸方向の転換が確認されている（現在は東西長軸の長地形）。また、法貴寺（20）でも同様の例（東西→南北。現在は南北）が報告されている。

(4) 旧河道

旧河道は、若槻１次(6)、美濃庄(9)、十六面（18）、池尻（29）がいずれも10世紀（前後）に埋没したものと考えられている。また今回、表ではとりあげていないが、下ツ道側溝も大和郡山市域、橿原市域で確認した限りにおいては、10世紀代に埋没したことが判明している[5]。こうした事実は、奈良盆地においては旧来よりの自然河川、ないしは一部の人工河川の埋没が10世紀代を中心として急激に進行したことを示すものとして注目できる。おそらく、該期においては奈良盆地の河川は大幅な人為的改変を受けているものと考えられる。

ついで、他のものについてみると、小槻（28）の旧河道は12世紀中葉に埋没している[6]。また、本庄・杉町１次(4)が15世紀前半の埋没、矢部１次（23）の旧河道が16世紀末、本庄・杉町２次(3)の旧河道が18世紀後半の埋没である。こうしてみると、中世後半～近世にかけての旧河道の埋没例が意外に多いことが知られる。なお、本庄・杉町１次旧河道は富雄川の旧河道と考えられており、土堤状の遺構や杭による岸部の補強が見られた。また同２次旧河道は秋篠川の旧河道と思われるが、ここでも竹、杭による護岸施設（図５）が見られた。

(5) 環濠居館

現在、奈良盆地で同種の遺構は５例確認されている。このうち若槻４次(7)、布留豊井（15）、十

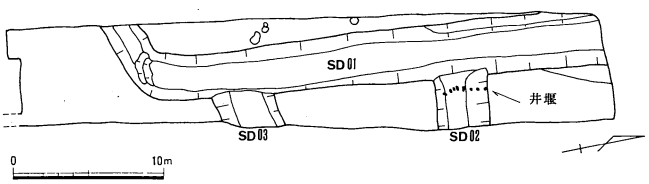


図７　小阪里中遺跡（３次）環濠平面図（文献㉑より再トレース）

六面（18）、法貴寺（20、図６）はいずれも1/4坪占地（環濠の１辺約50m）であることが調査により知られた。なお、小阪里中（19）例は、占地の規模は不明であるが、ここでは環濠本体（SD-01）に対しSD-02およびSD-03がそれぞれ直角にとり付いており（図７）、さらにSD-02の接続部分では堰が検出されている。このことから調査者の北野隆亮は、環濠自体に一種の灌漑機能を推定している[7]。

これらの環濠の時期については、小阪里中が若干先行する（13世紀）他は、いずれも14世紀に中心年代をもつ。また、法貴寺、布留豊井は16世紀代まで存続するものである。

(6) 環濠集落

発掘調査によって時期の判明した、環濠集落の環濠と推定されるものは４例確認されている。いずれもその埋没年代は16世紀末なしいは17世紀初頭である。その機能開始年代については15世紀ないしは16世紀と考えられるが、この場合、小阪里中（19）や十六面（18）例が示すように、前時期の環濠居館自体の近隣への拡張という現象もみられる。なお、環濠のもつ灌漑機能については、先の居館環濠のそれに比して保水量の面で格段の規模を有するものといえ、それは積極的に評価されるべきものと考える。

(8) 溜池・河川堤体

奈良盆地における溜池（ここではいわゆる「皿池」を指す）・堤体の最古例は、若槻池(5)堤体である（13世紀後葉）。なお、本例については文献（『徳治台帳』）にみる若槻池の初現とも整合する。この他、発掘調査によって堤体築造時期の判明したものには布留守目堂（16）例がある。ここでは堤体下より18世紀の遺構が確認されており、堤体築造は当然その後のこととなる。なお、こうした溜池の築造時期については、文献資料を用いた宮本誠の詳細な検討があり、それによれば溜池の築造は18世紀と20世紀に大きなピークがある[8]（図８）。

河川堤体については法貴寺（20）例がある。ここでは初瀬川堤防（1982年の破堤まで使用されていた）が18世紀の築造であることが判明した[9]。また、筆者は富雄川堤防の改修工事現場において18世紀代の肥前磁器を採集した経験があり、確実ではないが、富雄川の堤防の築造時期もまた該期であるとの心証を持っている。

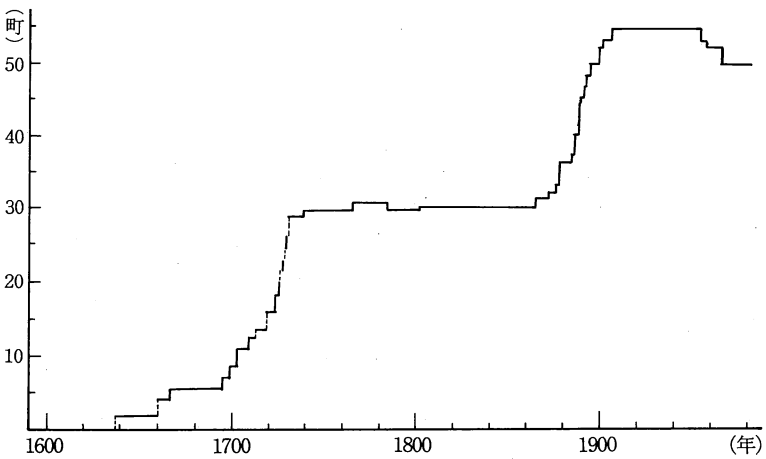


図８　田原本町における溜池面積の推移（推定）
（注８文献より。一部改変）

なお、河川（現）堤防の築造時期については、先に見た中世～近世の埋没旧河道との関係にも注目したい（後述）。

Ⅲ　奈良盆地における条里制の展開

図９は、前章で取り扱った条里制関連遺構の種別毎の消長を簡略に図化したものである。そこで表されているように、10世紀代には水田および坪境遺構などの増加が明らかに認められる。また、旧河道の埋没もこの時期に多くみられる。

ついで、13世紀にもまた先と同様に一つの画期が求められる。この時期には素掘小溝が一般化し、若槻池の築造をみる。以上２つの画期（10・13世紀中心）は、前章２項で触れた、寺沢の箸尾遺跡の検討により導き出された２つの画期（11・13世紀）にほぼ対応するものである。

ついで、14世紀を中心として、盆地各所には環濠居館が成立し、15～16世紀には環濠集落へと発展する。

また、中世末～近世初頭においては河川の埋没が再びピークを迎えるほか、現行河川堤防が築造される。また、溜池の築造も多くは該期以降のことである。以下、本章ではこれらの事実を基に、奈良盆地における条里制の展開について、若干の叙述を試みることとしたい。

１．部分的施行段階（８～９世紀）

奈良盆地において、大規模ないわゆる正向地割が開始されたのは、現在までの発掘資料で見る限りでは７世紀第２四半期と考えられる。このことについては、今回詳論しないが、その証拠としては、下ツ道側溝[10]や、北の横大路に隣接する高月（１～３次）の正方位の掘立柱建物群[11]、また中ツ道に隣接する平等坊・岩室のやはり正方位の掘立柱建物など[12]をあげることができる。

ついで、条里形地割の最古例としては８世紀前～中葉の長塚の坪境溝があり、海知例がそれに続く。また、多９次の河１も可能性としては正向地割遺構として捉えられる。こうしてみると、少なくとも８世紀前半以降、条里形地割は何らかの形で施行されたことは疑いがない。おそらく一部に

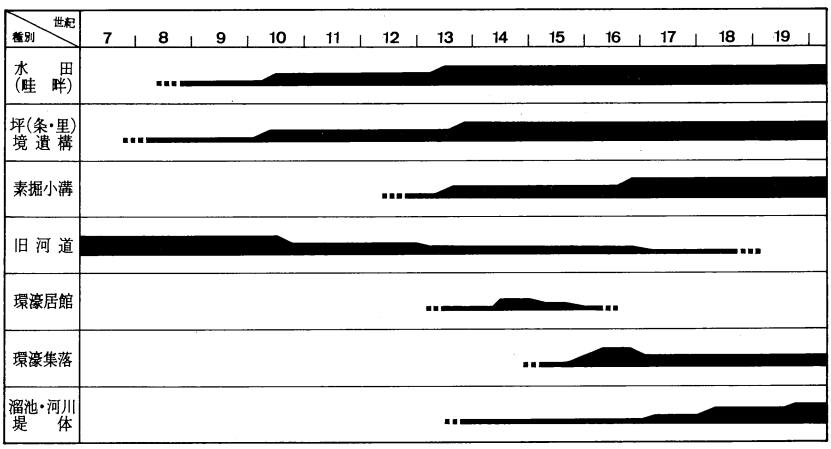


図９　奈良盆地における条里制関連遺構消長概念図

おいては水田自体が条里形に整備されていたものと考えられ、それを具体的に示すのが池尻の水田（１面）であろう。

ただし、ここで注意されるのは長塚、海知いずれも正向地割溝の埋没後に斜向地割が施行されている点である。この点についての解釈は今後の資料蓄積を待たねばならないが、可能性としては灌排水の問題上、該期では条里形の正向地割はやや無理があり、場所によってはいったん正向地割の溝を開削した後、再び斜向地割へと戻したということが考えられる。

いずれにせよ、この時期は条里形地割が部分的にせよ実施されたことは確実であり、また一部では条里形水田そのものが存在した。しかしながら、箸尾や多では広域の調査にも係わらず、該期の正向地割は全く見い出されてはいないことはやはり重要な事実といえる。本稿ではこの段階を条里形地割の「部分的施行段階」と呼んでおきたい。

２．面的拡張段階１（10～11世紀）

この段階では、自然河道の埋没が示すように、奈良盆地において河川の人為的な流路変更が大規模になされたものと思われる。そもそも、河川のつけかえの目的は、灌漑時の河川水の集約的利用である。このことは松浦茂樹が指摘する[13]ように、奈良盆地南部の人工的に平行化された河川に明瞭に示されている（図10）。すなわち、河川の平行化は取水区域と灌漑区域が重複しない配列をとる点に特徴がある。標高の高い河川から取水された用水は井堰を通じて「毛細血管のように」細分化されて各水田を潤し、余水はより低い標高の河川へと流れ込む。つまり、河川の平行化は取水→灌漑→集水という形で、用水のいわば反復的利用が可能となるという利点がある[14]。もとより水不足が顕著で、奈良盆地の農業の特徴を徹底的に調査した徳永光俊をして「奈良盆地の農業を根本的に規定したのは水不足」といわしめた[15]この地域においては、河川のつけかえよる平行化は耕地拡張の前提であり、必須条件であったといえよう。

つまり、以上の点は、河川のつけかえによる平行化がなされない以前の奈良盆地においては、ごく限られた地域でしか水田化―少なくとも条里形水田―は経営できなかった、と換言することができよう。筆者がこの前段階を「部分的」と称した理由には、それが河川の未平行化段階であった、という意味も含まれている。

いずれにせよ、くり返すがこの時期には盆地内の網流ないしは曲流していた河川が、「ある程度」のレベルで直線的に整流されたものと思われる（なお、ここで「ある程度」と述べた理由については本章の５項において触れたい）。そして、河川の平行化により河川水の集約的利用（既述）が可能となった段階をもって、箸尾の０期水田が端的に示すような、耕地面積の急速な拡張は遂行されたものと推定される。

3．面的拡張段階２（14～16世紀）

この段階では、表３、４の遺構消長表に見るように、耕地面積はまさに飛躍的に拡大したものと思われる。現在知られている坪境遺構などの大半は該期において掘削もしくは造成されたのものである。また、箸尾遺跡のⅡ期水田は、寺沢がいうように耕地開発が微高地にまで及んだことを具体的に示す遺構である。なお、こうした開発の進展の背景には河川のつけかえのさらなる進行があったものと推定される。

しかしながら、耕地面積の飛躍的拡大は、水不足という事態を改めて招いたことと思われる。そして、そのことを示す１例が素掘小溝である。該期において一般化するこの遺構については、八尾博之[16]や今尾文昭[17]の詳細な検討により、「水田の畑地化にともなうもの」ということがほぼ判明している。それはすなわち、用語的には「田畑輪換」と称されるところの一種の節水農法である。つまり、水田を畑地化することによって水不足を補おうとした痕跡がこの素掘小溝である。

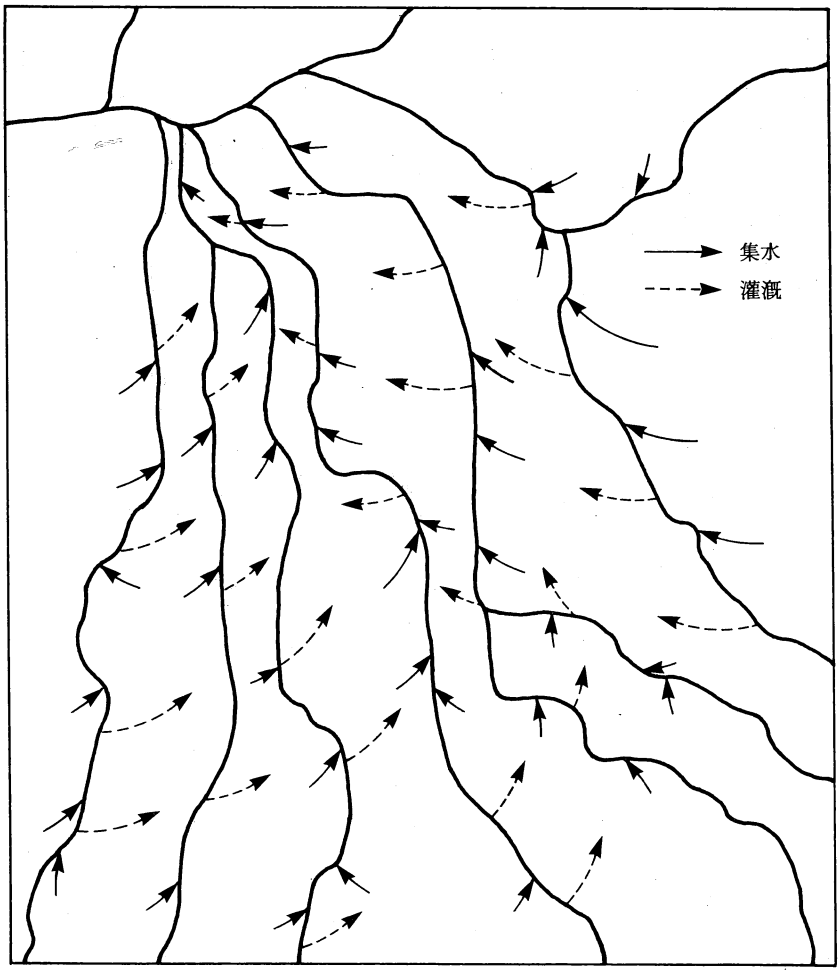


図10　奈良盆地南部の河川の集水と灌漑
（注13文献を基に作成）

なお、該期には若槻池も築造されている。こうした溜池の築造はこのころには一般化はしなかったものと思われるが、用水不足を補う手段としてこの種の貯水施設が採用された、という事実は重要である。

以上のように、素掘小溝ないしは溜池の築造が、用水不足への対応策と考えられる点より、これらの遺構は該期における耕地の飛躍的な拡大を別の面から裏付けるものであるともいえよう。

4．拡張完了段階（14～16世紀）

筆者は、先の12～13世紀のいわば「大開墾時代」において、奈良盆地内の耕地面積は現在のそれの７～８割にも達したものではないかと想像する。そして、それを表徴するかのように、14世紀以降、それぞれの在地有力者の拠点としての環濠居館が盆地各所に築かれていった。その環濠はまた膨大な貯水機能をもち、灌漑期においては井堰を通じて周辺（すなわち「有力者－環濠居館のあるじ」の領地）の水田を潤したものと思われる。我々はその具体的な姿を小阪里中３次のSD-01およびSD-02、03より見ることができる（図７）。先に引用したように、徳永はその詳細な研究の結果、奈良盆地の農業を「根本的に規定したもの」は「常習的な水不足」であり、「農業は水との闘いであったといっても過言ではない」とした。そして「水を支配するものが強者であった」という指摘を行っている[18]。この環濠居館は、徳永のこうした規定をまさに遺構の上で具現したものということができる。

なお、環濠のもつ貯水機能は、環濠居館の一種の発展形態とも考えられる、環濠集落の環濠へと受け継がれることとなった[19]。これはかつての1/4坪規模のものとは異なり、少なくとも１坪以上を囲繞する大規模なものである。したがって、その貯水量もまた、相当に膨大なものであったと思われる。

5．現行景観確立段階（17～18世紀）

この段階においては、盆地内で溜池が急増する（図８参照）。また、河川の完全な固定、すなわち高い堤防による本格的な河川改修が実施されたのもこの時期のことと思われる。先に、２項で河川の整流を「ある程度」と表現したのは、それが現在我々が目にするところの、高い堤防によって仕切られた現行河川とはやや異なるものであったと思われるからである。こうした本格的な堤防の築造はやはり該期まで下るものであろう。それ以前については、本庄・杉町２次（図５）や同１次（堤状土盛り、杭による護岸）程度の「整流」であったと考えられる。そもそも、本庄・杉町１次旧河道は富雄川旧河道、同２次旧河道は秋篠川旧河道と考えられているが、現在は両河川ともに高い堤防によって仕切られ、検出された旧河道とは全く異なる方向性をもつ。このことは、奈良盆地において地形図ないしは航空写真によって判読される旧河道のうちのいくばくかは、その埋没は該期以降のこととなることを示している[20]。

それでは、こうした溜池の急増、ないしは河川のいわば「再整流」が実施された背景にはどのような事情があったのであろうか。本稿においては、少なくともこの前段階（14～16世紀）において耕地自体の外延的な拡張はほぼ完了していたものとして捉えている。したがって、こうした灌漑施設の大規模整備の主な要因として、耕地面積自体の拡張と考えることは難しいように思われる。

宮本は、該期において溜池急増の要因を「二毛作の普及」と想定している[21]。すなわち、二毛作の普及とは土地生産力自体の向上であり、それを可能とするためには用水、肥料ともに従来の一毛作の倍近いものが要求されることとなる。宮本は、そうした事情を背景とする水の需要を満たすために、この時期に溜池が次々に築造されたものと想定するのである。それでは、こうした現象は発掘資料にはどのように反映されるであろうか。以下、宮本の見解を裏付ける意味から、若干の事例を述べてみたい。

16世紀以降、都市部（近隣では堺環濠都市、奈良盆地内では近世奈良町や郡山城下など）においては土師質（和泉）ないしは瓦質（大和）の、便槽としての用途をもつ大形の甕が普及する。嶋谷和彦はこれを都市と農村部の需給関係、すなわち人糞尿の都市部における商品化を意味するものとして捉えている。さらに、嶋谷はこうした人糞尿の商品化の背景として、農村部における商品作物栽培の一般化を想定している[22]。

また、花粉分析の面より、金原正明は奈良盆地内の16世紀後半以降の耕土層よりアブラナ花粉が激増することを指摘している[23]。以上のように、こうした考古学上の事例からも該期における商品作物栽培＝二毛作の一般化は十分に肯定されるのである。したがって、溜池の急増や河川の再整備は、まさにこうした事情が背景となったものと考えられるものである。

図11は、昭和初期の奈良盆地における灌漑の実情を示すグラフである。これで見るように、当時（吉野川分水の配水以前）では盆地（平坦部）の灌漑用水はその60～70％を溜池水によっていることがわかる[24]。こうした事実からも、近世～近代にかけての水利系統は、溜池の急増時期である該期をもって確立されたものということが知られる。

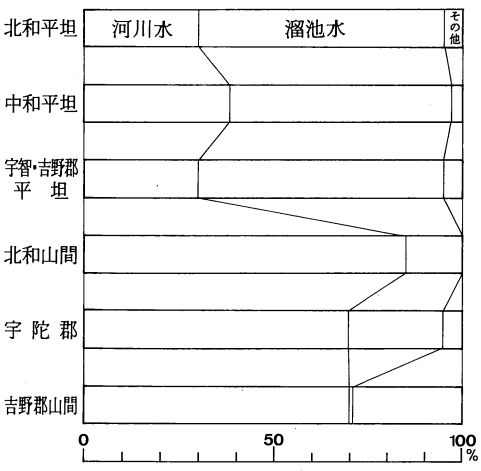


図11　昭和初期の奈良盆地における灌漑
（注24文献より作成）

以上のように、現在我々が目にする溜池、もしくは高い堤防によって仕切られた直線的な河川は、該期にその大半が築造されたものと思われる。そして、その背景には二毛作の普及があった。すなわち、現在の奈良盆地の景観は該期をもって確立したものということができる。

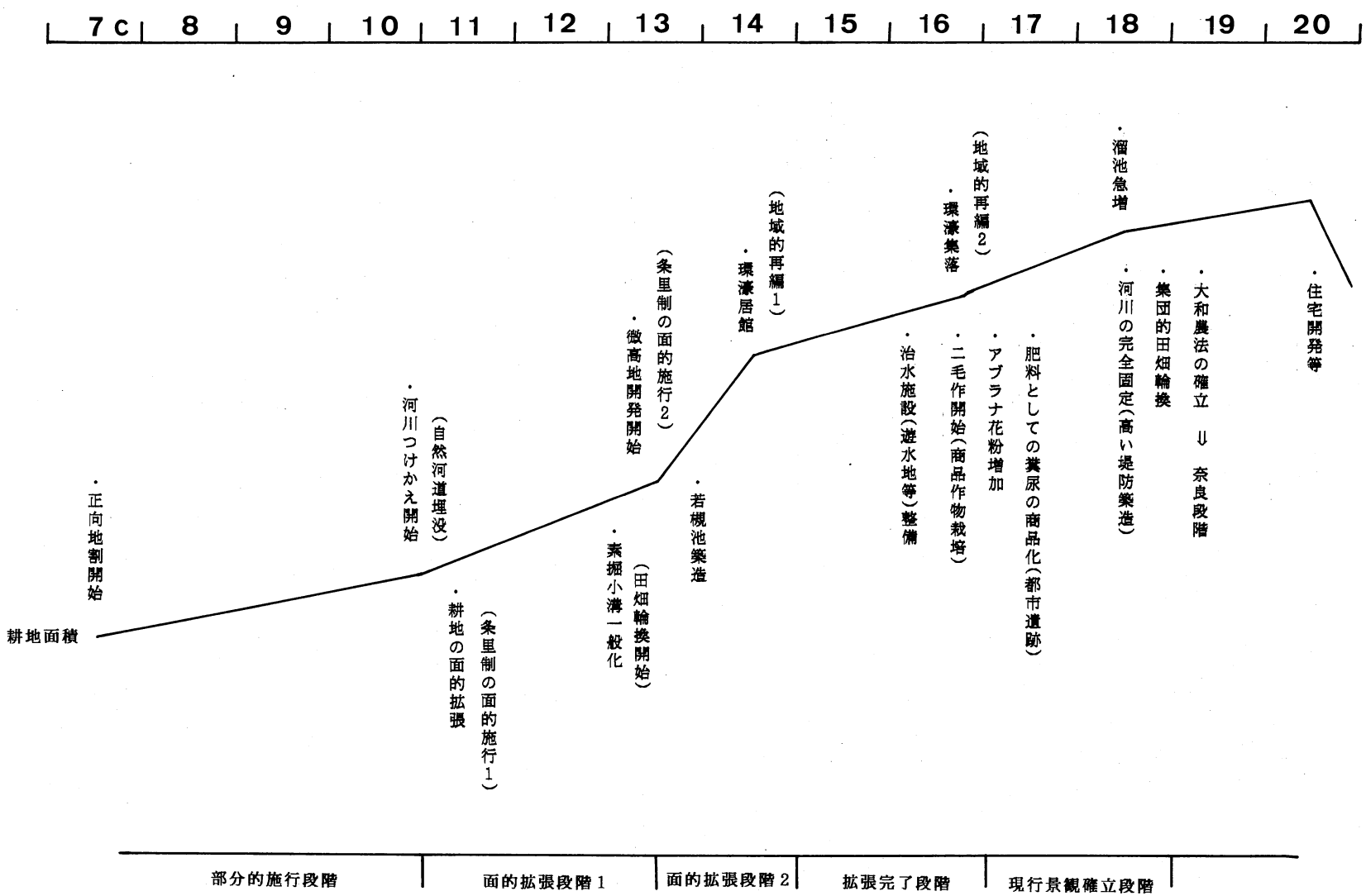


図12　奈良盆地における条里制の展開模式図

Ⅳ まとめ

本稿では前章までに、奈良盆地における条里制の展開について、主として発掘資料を基に検討を進めてきたが、以下にそれらを要約し、小稿のまとめとしたい（図12参照）。

奈良盆地では、8世紀には部分的に条里形地割が施行され、条件の許容する地域では条里形水田がごく一部にせよ整備された。しかしながら、条里形水田を主体とする耕地が面的な拡張を見せるのは、河川の人為的改変、すなわち平行化がある程度なされた10世紀以降のこととなる。こうした耕地の面的拡張は13世紀を中心として急激な進捗をみせた。しかし、耕地の急増な拡大は深刻な水不足を招き、人々は水田を畑地化すること、あるいは少数例にせよ溜池を築造することでこの事態を凌いだものと思われる。

14世紀に至ると、豊かな生産力を背景とし、地域の有力者の拠点として環濠居館（1/4坪）が盆地各所に登場する。そして、それは環濠自体のもつ膨大な貯水量を背景とし、いわば「水」の面からも農民たちを支配した。なお、こうした環濠自体の灌漑利用は後（15世紀以降）の環濠集落へも受け継がれることとなった。

ついで、16世紀に至ると、都市部の拡大に伴う商品作物の栽培が盛んとなり、二毛作が一般化する。このため、奈良盆地では再び水不足の自体を招き、その対応策として溜池が多数築造され、河川が大幅な改修を受けることとなった。そして、こうした溜池や高い堤防によって仕切られた直線的な河川は、条里形水田とともに現在の奈良盆地の景観を特徴付けることとなっている。

以上が、今回の検討を通じて知り得た点、推定される点の要約である。こうしてみると、奈良盆地における条里制の展開は、その当初より「水」によって規制され、また現在みるその最終景観もまた、「水」によって決定されたものといえそうである。わが奈良盆地の先人達は、この狭い盆地の中に、いかにして水を蓄えるかについて腐心してきた。そして、その叡智の結実が、現在我々が目にするこの大和の景観なのである。

しかしながら今日、その先人達の営々たる「水との闘い」の記念碑は、美しい条里景観は、農村部の急速な都市化や住宅開発などで、我々の前から今、永遠にその姿を消そうとしている。そして、皮肉なことにその引替えとして、我々は地下に眠る条里遺構を目にすることができ、そうした資料を基にして本稿は執筆された。かような意味において、小稿は消えゆく条里景観に捧げるささやかな慰霊碑でもある。

本稿執筆に際し、下記の方々より多くの有益な御教示、御指導、御協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

青木勘時、足利健亮、池田保信、今尾文昭、太田三喜、近江俊秀、金原正明、北野隆亮、嶋谷和彦、竹谷俊夫、武田浩子、竹田政敬、寺沢薫、前沢郁浩、松本洋明、宮本誠、山中敏史、和田萃。

《注》

(1) 中井一夫「地域研究－奈良県における発掘調査から」『条里制の諸問題Ⅰ』奈良国立文化財研究所　1982

(2) 文献⑱など

(3) 注(2)に同じ

(4) 素掘小溝からの完形土器の出土について、北野隆亮は祭祀等に伴う埋納（文献㉑）を考えている。

(5) 大和郡山市域については稗田環濠隣接地の調査における下ツ道東側溝出土資料を筆者実見。また、橿原市域については藤原京右京五条四坊の調査における下ツ道東側溝の出土資料を第31回大和古中近研究会で竹田政敬の厚意によって筆者実見。『藤原京右京五条四坊発掘調査中間成果』橿原市教育委員会　1992

(6) 小槻旧河道の埋没時期については、報告書（文献㉙）では13世紀とあるが、出土遺物実測図（P23. 第22図）で判断する限り、そこで出土している瓦器椀は12世紀初頭～中葉のものである。また、同図37番は、中世末～近世初頭の陶器碗底部であろう。

(7) 文献㉑。なお、法貴寺の調査者である今尾文昭も同様の見解を持つ。今尾文昭「法貴寺遺跡」『自然と文化』30　観光資源保護財団　1990

(8) 宮本誠「田原本の溜池」『田原本の歴史』3　田原本町史編さん室　1984

(9) 今尾の教示による。

(10) 注(5)に同じ。なお、今尾の調査（1992）による横大路側溝の機能年代は７世紀末～である。（同氏の教示による）

(11) 山川　均『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会　1991

(12) 調査者の青木勘時の教示による。『平等坊・岩室遺跡第８次発掘調査概要Ⅱ』天理市教育委員会　1992

(13) 松浦茂樹「古代大和盆地における開発と河川処理」『水利科学』38　1985

(14) 宮本誠『土地改良の投資効果Ⅱ』農林漁業金融公庫　1987

(15) 徳永光俊「奈良盆地中央部における近代農業への転換(2)」『田原本の歴史』3　田原本町史編さん室　1985

(16) 八尾博之「中世素掘り溝について」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所　1986

(17) 今尾文昭「『中世』素掘り小溝についての一解釈」『青陵』47　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1981

(18) 注(15)に同じ。

(19) むろん、「居館」と「集落」の両者にはその規模や構造上、大きな隔たりがある。そして、そこに何らかの意義を見い出すことは、発掘資料の増加している今日ではさほど困難とはいえない。ただし、それは本稿の主旨とは別次元の問題となろう。この問題については近年中に別稿を用意したい。

(20) 旧河道の存在をいわゆる「条里の乱れ」より推定される旧河道の事例については、その埋没時期を近世以降に考えるべきものが以外に多いのではないだろうか。たとえば、発掘調査によって検出された10世紀代の埋没旧河道については、その大半は地表面にさほどの痕跡を遺してはいない。

(21) 注(14)に同じ。

(22) 嶋谷和彦「堺環濠都市遺跡検出の便所遺構とその問題点」『関西近世考古学研究会第23回例会レジメ』 1992
なお、同様の見解をもつ論考に、川口宏海「中・近世都市における便所遺構の諸様相」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992がある。

(23) 金原正明「花粉分析からみた奈良盆地の近世近代の植生、栽培、景観」『天理参考館報』 3
天理参考館 1990

(24) 農林省農務局編『水稲及陸稲耕種要項』大日本農会 1936

No.	遺跡名	所在	条里呼称	遺構の名称	遺構の規模(m)	概要 時期	備考	文献
1	長塚	大和郡山市下三橋町長塚	添上郡京南辺条1里10,15坪々境	溝 SD-11	W:1.0 d:0.5	8C前～中	耕作関係遺構認められず	①
2	古屋敷	大和郡山市田中町古屋敷	添下郡京南3条5里2,3坪々境	環濠	W:7.0 d:2.0	16C後	環濠集落環濠	②
3	本庄・杉町(2次)	大和郡山市本庄町154-1ほか	添下郡京南4条2里2坪内	旧河道	d:1.5	～18C後	埋没後水田化(人為的堆積) 河西岸、竹および杭により補強 旧秋篠川？	③
4	本庄・杉町(1次)	大和郡山市杉町北前田	添下郡京南4条2里10坪内	旧河道	W:50以上 d:2.3	～15C前	北岸に堤状土盛、杭により補強 旧富雄川？	④
5	若槻池	大和郡山市若槻町4	添上郡京南2条1里27,28坪内	溜池堤体		13C中～後	「筒治土幌」記録(1307)と時期的に整合	⑤
6	若槻(1次)	大和郡山市稗田町	添下郡京南4条1里14坪内	畦畔	W:1.0(0.8) T:0.3	～14C前	現行長地形地割に整合	
			添下郡京南4条1里15坪内	水田		6C後半	自然地形に沿う	
				溝	W:0.1 d:0.1			
				奈良時代溝	W:0.2 d:0.1	8C	N45° Wの方向	
				中世溝		中世	条里地割整合、南北方向	⑥
			添下郡京南4条1里11坪内	水田		～8C	埋没旧河道利用,W:0.2mの溝伴う	
				畦畔		(11C？～)14C前～	条里地割整合	
			添下郡京南4条1里3,8坪内	旧河道	W:10.0 d:2.0	～平安初頭？		
7	若槻(4次)	大和郡山市若槻町 ほか	添上郡京南2条1里33坪内	素掘小溝	W:0.3		5時期あり (東西4時期、南北10時期)	⑦
8	若槻(3次)	大和郡山市若槻町	添上郡京南2条1里32坪内	溝 SD-02	W:3.0 d:1.5	14C末(？)	環濠居館、1/4坪占地	⑧
9	美濃庄	大和郡山市美濃庄町282	添上郡京南2条2里16,17坪々境付近	旧河道	d:1.0～1.5	～10C前	坪境付近で東西に整流？ 旧菩提仙川水系(砂礫種)	⑨
10	発志院	大和郡山市発志院町	添上郡京南4条2里11,12坪々境	溝	W:2.1 d:1.0	中世～		
			添上郡京南3条(2里7坪)、同4条(2里12坪)条境	道(大畦畔)	W:1.8	鎌倉～		
			添上郡京南4条2里10,11坪々境	道(片側側溝)	道 W:1.8 T:0.4 溝 W:1.8 d:1.0	中世～		⑩
11	高月(4次)	大和郡山市小泉町高月	添下郡京南6条4,5里々境	溝 SD-01	W:2.6～3.5 d:0.4～0.6	13C後～15C前	N3° E	⑪
12	酒ノ免(1次)	生駒郡斑鳩町東福寺	平群郡8条8里3,4坪々境	畦畔	W:0.7 T:0.3	中世？	後に道(片側水路)となる	⑫
13	目安	生駒郡斑鳩町目安	平群郡10条3里8,17坪々境	畦畔	W:1.0 T:0.5	中世		
			〃 17,18坪々境	畦畔	W:1.0 T:0.5			⑬
			〃 7,8坪々境	畦畔	W:0.5 T:0.4			
14	合場	天理市合場町	山辺郡11条3里5,6坪々境	溝 SD-2	W:4.0 d:1.5	中世		⑭
15	布留 豊井(打破り地区)	天理市豊井町66 ほか	山辺郡8条8里30坪内	環濠居館	南側東西溝 W:8.0 d:2～2.5 北側東西溝 W:8.0 1:5.4 d:3.5 西側南北溝 W:8.0 d:3.5	14C末～16C前	南側東西溝は山辺郡8,9条々境となるか？ 環濠は1/4坪占地	⑮
16	布留 守目堂(ツルクビ地区)	天理市守目堂255-1 ほか	山辺郡9条7里18坪内	溜池堤体		18C～	堤体下に近世遺構	⑯
17	峯尾(1次)	北葛城郡広陵町沢 ほか	広瀬郡14条3里21,22坪々境	道 側溝SD-111 SD-113	SD-111 W:2.0 d:0.7 SD-113 W:1.0 d:0.2	～10C初		⑰
				溝 SD-112	W:0.8～1.0 d:0.2		SD-111,113より新	
	(5～7次)	〃	広瀬郡14条3里12,13坪々境	溝	W:3.5	0期 10C末～12C	11Cと13C後半の2つの画期あり	
			〃 13,14坪々境	道	W:1.5～2.0	I期 12C後～13C中		
			〃 14,23坪々境	溝	W:3.5～4.5	II期 13C中～14C後		
			〃 8,17坪々境	道	W:20	III期 以降14C後～		⑱
			〃 16,17坪々境	小道	W:0.8			
			〃 17,20坪々境	溝	W:5.0			
			広瀬郡14条3里内	水田				
18	十六面	磯城郡田原本町	十市郡路西18条3里17,18坪内 ほか	環濠居館 山ノ内大溝北辺 SD-04 同 東辺 SD-05	 W:4.2 d:1.2～1.3 W:3.1～3.2 d:0.5～1.0	14C中～後	1/4坪占地	
				環濠 北辺溝 SD-30 西辺溝 SD-31	 W:4.0～4.5 d:1.6～1.8 W:5.5～6.0 d:1.8～2.0	16C後～17C前	環濠集落環濠 なお、十六面遺跡での正方位区画初現は12C前(SD-13)	⑲
			十市郡路西17条3里13坪	旧河道I	W:23 d:3.0	4C～10C？	旧寺川水系(砂礫種)	

表1 奈良盆地における条里制関連遺構一覧表 1

No.	遺跡名	所在	条里呼称	遺構の概要 名称	規模 (m)	時期	備考	文献
19	小阪里中	磯城郡田原本町小阪	城下郡路東15条1里8坪内	大溝 SD-01	W:6.5 d:1.5	16C後～19C	17Cに再掘削	
				大溝 SD-02	W:4.0 d:1.3	16C後～17C前		
				大溝 SD-03	W:2.0 d:0.9	15C～16C前		㉙
				大溝 SD-05	W:2.2 d:0.5	15C～16C前		
			〃 7,8坪々境	大溝 SD-1003	W:2.0	15C～16C前	以上1次調査	
			〃 7坪内	素掘小溝	W:0.2～0.8 d:0.1	13C前	完形瓦器椀、土師皿出土 南北長軸(現在東西長軸) 2次調査	
			〃 5坪内	大溝 SD-01	W:3.0～0.4 d:0.9	13C前？～14C中		
				大溝 SD-02	W:3.7 d:0.6	13C前	SD-01接続部に堰	㉛
				大溝 SD-03	W:3.6 d:0.6	13C前		
				耕作遺構 SX-01	W:6.0 d:0.6	13C初	溝3本伴う	
20	法貴寺	磯城郡田原本町法貴寺	城下郡路東14条2里32坪	環濠居館 北大溝 南大溝 南外大溝 西大溝	 W:6.4 d:1.4 W:4.8～4.0 d:1.3～1.5 W:4.4～5.8 d:1.0～1.1 W:5.0 d:1.3	14C中～16C末	北大溝＝31,32坪々境 西大溝＝29,32坪々境 1/4坪占地	㉜
			〃 33坪	素掘小溝	W:0.15～0.20 d:0.10～0.15	13C中～	東西長軸⇒南北長軸 (現在南北長軸)	
21	海知	天理市海知町	城下郡路東15条4里22,27坪々境	溝	W:2.0～5.0	8C後	西15mに旧河道(中世埋没) 東20mに奈良～平安の斜行溝 古代坪境溝に隣接して18C後～の現行坪境溝あり	㉝
22	矢部(2次)	磯城郡田原本町矢部	十市郡路西18条3里	おちこみ(地割)		14C末～	トレンチ自体が坪境(8,9坪および4,5坪)	㉞
23	矢部(1次)	磯城郡田原本町矢部	十市郡路西18条3里15坪	素掘小溝	W:0.2～0.4 d:1.0～0.2	平安末以降	長軸方向の転換 Ⅰ(南北)⇒Ⅱ(東西)⇒Ⅲ(東西)⇒Ⅳ(南北)	㉟
			〃 16坪	旧河道	W:12.0	古墳～中世末、近世	旧初瀬川水系(砂礫種)	
24	金剛寺	磯城郡田原本町金剛寺	広瀬郡18条1里18坪内	大溝 SD-53		15C後～17C初	洪水による堆積	
			〃 17,18条々境	大溝 SD-52		15C後？～16C後	橋脚あり 人為堆積	
				大溝 SD-54		15C後～17C初	洪水による堆積	㊱
				道 SD-01 SD-02	W:2.5 d:0.8 W:2.3 d:0.6 道 W:7.0	18C後～20C初		
25	多(10次)	磯城郡田原本町多、宮森	十市郡路西19条2里18,19坪々境	道(両側溝)	溝 W:東1.0 西2.0 道 W:1.0	13C初～	坪境溝初現は12C初	
			〃 20条2里13,24坪々境	溝	W:2.0	〃		
			〃 19,20条々境	道(両側溝)	溝 W:北1.0 南1.5～2.0 道 W:0.5～0.8	〃	溝境溝以西は小畦畔(W:0.5m)のみ	㊲
			〃 19条2里17坪	素掘小溝		(7～10C？)45'斜行⇒(13C末～14C初)南北⇒東西(現行東西長軸)		
			〃 18,19坪および同20条2里13,24坪	水田	畦 W:0.3～0.5	0期:12C初～13C初 Ⅰ期:13C初～13C前 Ⅱ期:14C中～16C中 Ⅲ期:近世初？ Ⅳ期:近世末～現代		
26	多(9次)	磯城郡田原本町多	十市郡路西20条2里20,21坪々境	溝 42	W:3.0 d:0.8	12C？～14C末	溝42,43の土器接合するものあり なお、溝43の南北方向のものは河1の中軸ラインに適合	
				溝 43	W:2.5～3.5 d:0.2	12C前～12C中		
				溝 45	W:1.1 d:0.7	～14C末		㊳
			〃 16,17坪々境	溝 48	W:1.5 d:0.7	～14C末		
			〃 21,28坪々境？	河 1	W:10.0 d:2.5	7C～8C	寺川中軸(下ツ道)より西へ約420m当初の21,28坪々境？	
27	阪手	磯城郡田原本町阪手	城下郡路東17条1里18坪内 ほか	素掘小溝	W:0.2 d:0.15	13C初	完形瓦器椀、土師皿出土	㊴
28	小槻	橿原市小槻町	十市郡路西21条1里18坪内	旧河道	W:70～80 d:3.0以上	～12C中	旧曽我川水系(砂礫種)	㊵
29	池尻	大和高田市池尻	広瀬郡22条3里23坪内	水田		1面 8C末 2面 9C 3面 10C	いずれも条里形	㊶
				旧河道	W:2.5～4.0	～10C		

表2 奈良盆地における条里制関連遺構一覧表 2

種別	遺跡名	遺構名	摘要	7c	8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	20c	備考
水田（畦畔）	池尻	水田面1面	広瀬郡22条3里23坪内															
		水田面2面	〃															
		水田面3面	〃															
	多(10次)	0期水田	十市郡路西19条2里18,19坪 〃 20条2里13,24坪															
		Ⅰ期水田	〃															
		Ⅱ期水田	〃															
		Ⅲ期水田	〃															
		Ⅳ期水田	〃															
	箸尾	0期水田	広瀬郡14条3里内															
		Ⅰ期水田	〃															
		Ⅱ期水田	〃															微高地開発開始(溜井、島嵩)
		Ⅲ期以降水田	〃															
	若槻(1次)	畦畔	添上郡京南4条1里11坪内															
坪（条・里）境遺構	長塚	溝 SD-11	添上郡京南辺条1里10,15坪々境															
	発志院	溝	添上郡京南4条2里11,12坪々境															
		道	添上郡京南3,4条々境															
		道	添上郡京南4条2里10,11坪々境															
	高月(4次)	溝 SD-01	添下郡京南6条4,5里々境															N3°E
	酒ノ免(1次)	畦畔	平群郡8条8里3,4坪々境															
	目安	畦畔	平群郡10条9里8,17坪々境 ほか															
	合場	溝 SD-2	山辺郡11条3里5,6坪々境															
	箸尾	道 SD-111,113間	広瀬郡14条3里21,22坪々境															
		溝 SD-112	〃															
		溝および道	広瀬郡14条3里14,23坪々境 ほか															詳細な時期は水田に同じ
	海知	溝(古)	城下郡路東15条4里22,27坪々境															東方20mに8C～9Cの斜行溝あり
		溝(新)	〃															
	多(10次)	溝および道	十市郡路西19,20条々境 ほか															
	多(9次)	溝 42	十市郡路西20条2里20,21坪々境															現行坪境(水路下)
		溝 43	〃															〃
		溝 45	〃															〃
		溝 46	〃 16,17坪々境															〃
		河 1	〃 21,28坪々境															寺川中軸(下ツ道)より西方約420m 当初の21,28坪々境か？
素掘小溝	若槻(4次)	素掘小溝	添上郡京南2条1里33坪内															5時期(東西4,南北1)あり
	小阪里中(1次)	〃 SD-01～20	城下郡路東15条1里7坪内															完形瓦器椀、土師皿出土
	〃 (3次)	耕作遺構 SX-01	〃 5坪内															〃
	法貴寺	素掘小溝	城下郡路東14条2里33坪内															東西⇒南北(現行南北長軸)
	矢部(1次)	〃	十市郡路西18条3里15坪内															Ⅰ(南北)⇒Ⅱ(東西)⇒Ⅲ(東西)⇒Ⅳ(南北) 現行南北長軸
	多(10次)	〃	十市郡路西19条2里19坪内															
		〃	〃															南北⇒東西 現在東西長軸
	阪手	〃	城下郡路東17条1里18坪内															完形瓦器椀、土師皿出土(時期明確)

45'斜行

表3 奈良盆地における条里制関連遺構消長表 1

種別	遺跡名	遺構名	摘要	7c	8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	20c	備考
旧河道	本庄・杉町(2次)	旧河道	添上郡京南4条2里2坪内															旧秋篠川？ 西岸竹および杭により補強
	〃 (1次)	〃	〃 10坪内															旧富雄川？ 北岸に堤状土盛あり
	若槻(1次)	〃	添下郡京南4条1里3，9坪内															
	美濃庄	〃	添上郡京南2条2里16，17坪々境付近															坪境付近で東西方向に整流？ 旧菩提仙川水系
	矢部(1次)	〃	十市郡路西18条3里16坪内															旧初瀬川水系
	十六面	旧河道 I	十市郡路西17条3里13坪内															旧寺川水系
	小槻	旧河道	十市郡路西21条1里18坪内															旧曽我川水系
	池尻	〃	広瀬郡22条23坪内3															
環濠居館	若槻(4次)	溝 SD-02	添上郡京南2条1里32坪内															1/4坪占地
	布留豊井(打破り)	南側東西溝 ほか	山辺郡8条8里30坪内															〃
	十六面	山ノ内大溝	十市郡路西16条3里17坪内															〃
	小阪里中(3次)	大溝 SD-01 ほか	城下郡路東15条1里7坪内															
	法貴寺	北大溝 ほか	城下郡路東14条2里32坪内															1/4坪占地
環濠集落	古屋敷	環濠	添下郡京南3条5里2，3坪々境															
	十六面	溝 SD-30,31	十市郡路西16条3里18坪内															
	小阪里中(1次)	大溝 SD-03 ほか	城下郡路東15条1里8坪内															
		大溝 SD-01 ほか	〃															
	金剛寺	大溝 SD-53 ほか	広瀬郡18条1里18坪内															
河溜堤川池体	若槻池	溜池堤体	添上郡京南2条1里27,28坪内															
	布留守目堂(ツルクビ)	〃	山辺郡9条7里18坪内															
	法貴寺	河川堤体	城下郡路東14条2里															

表4　奈良盆地における条里制関連遺構消長表　2

文献一覧（表１、２に対応）

① 山川均『長塚遺跡発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会　1987

② 濱口芳郎『古屋敷遺跡第３次発掘調査概要報告』大和郡山市教育委員会　1991

③ 山川均『本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会　1989

④ 寺沢薫ほか「本庄・杉町遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1979年度　奈良県立橿原考古学研究所　1980

⑤ 服部伊久男『若槻池発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会　1987

⑥ 中井一夫「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1976年度　奈良県立橿原考古学研究所　1977

⑦ 中井一夫「若槻庄関連第４次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度　奈良県立橿原考古学研究所　1983

⑧ 中井一夫「若槻庄関連第３次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度　奈良県立橿原考古学研究所　1983

⑨ 山川均『美濃庄遺跡（四反田地区）発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会　1988

⑩ 藤井利章ほか『発志院遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊　奈良県教育委員会　1980

⑪ 山川均『高月遺跡第４次発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会　1993　（本書）

⑫ 藤井利章「酒ノ免遺跡試掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報』1978年度　奈良県立橿原考古学研究所　1979

⑬ 長谷川俊幸「目安遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度　奈良県立橿原考古学研究所　1983

⑭ 泉武「合場遺跡（第２次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』天理市教育委員会　1985

⑮ 『発掘瓦版』号外№10　埋蔵文化財天理教調査団　1990

⑯ 日野宏「守目堂（ツルクビ）地区の発掘調査」『発掘調査20年』天理参考館分室　1991

⑰ 中井一夫ほか「箸尾遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1980年度　奈良県立橿原考古学研究所　1981

⑱ 寺沢薫「大和における中世開発の一様相」『条里制研究』７　条里制研究会　1991

⑲ 松本洋明ほか『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第54冊　奈良県立橿原考古学研究所　1986

⑳ 藤田三郎『小阪里中古墳・里中遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会　1987

㉑ 藤田三郎・北野隆亮『小阪里中遺跡第２・３次発掘調査概報・千代遺跡第１次発掘調査概報』田原本町教育委員会　1992

㉒ 今尾文昭ほか「法貴寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度　奈良県立橿原考古学研究所　1989

㉓ 松本洋明の教示による。

㉔ 佐々木好直「矢部遺跡第２次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1984年度　奈良県立橿原考古学研究所　1985

㉕ 寺沢薫・八尾博之ほか『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所　1986

㉖ 藤田三郎ほか『金剛寺遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会　1988

㉗ 寺沢薫「多遺跡第10次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度　奈良県立橿原考古学研究所　1989

㉘ 佐々木好直「多遺跡第９次発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1984年度　奈良県立橿原考古学研究所　1985

㉙ 東潮「阪手遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1982年度　奈良県立橿原考古学研究所　1983

㉚ 伊藤勇輔ほか『小槻遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第50冊　奈良県立橿原考古学研究所　1986

㉛ 前沢郁浩『池尻遺跡（第１次）現地説明会資料』大和高田市教育委員会　1992

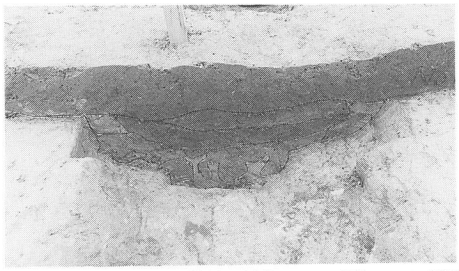
図　　版

図版1　高月4次（空中写真）

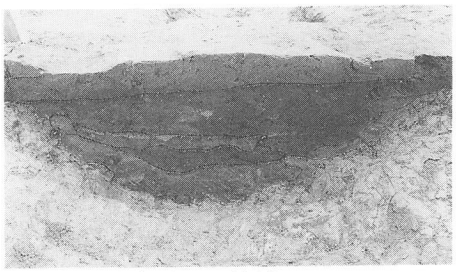
調査地全景（上が北。東方が現在の里道）

1．SD-01　完掘状況(南より)

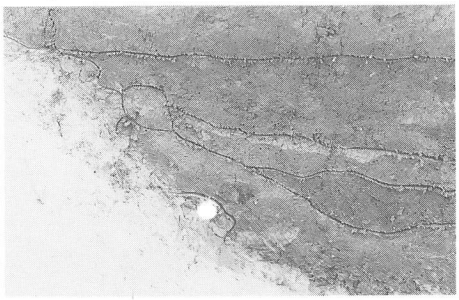
2．同　上(北より)



1．SD-01　土層堆積状況(北より。図6－1対応)



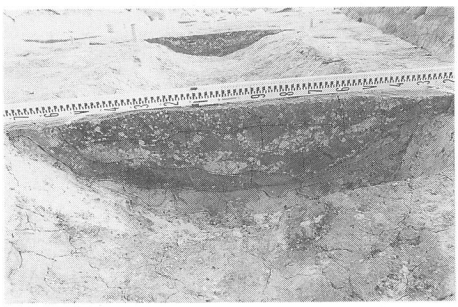
2．同　左(図6－2対応)



3．上段2部分(図5－c層の状況)

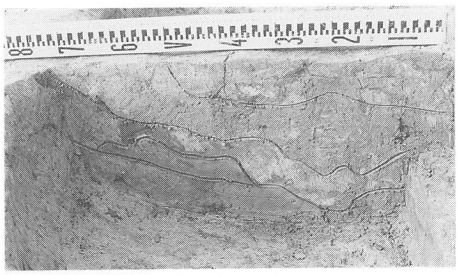
4．同　左

5．SD-10　土層堆積状況(北より。図6－3対応)

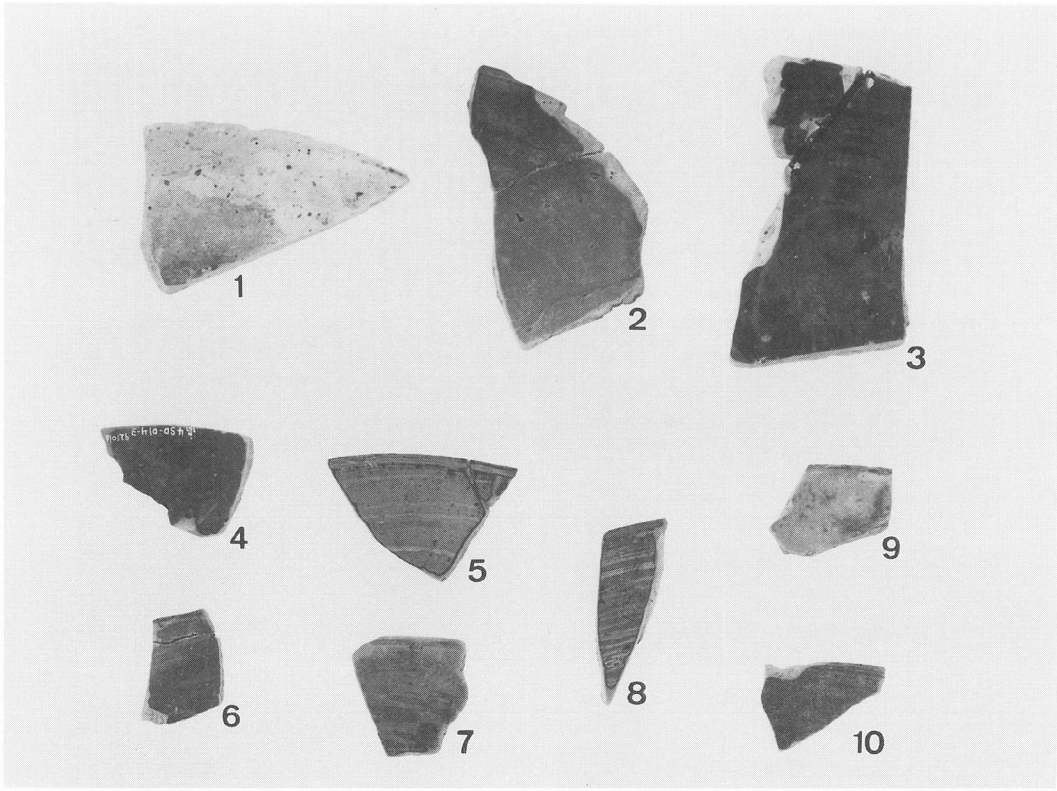


6．SD-02　土層堆積状況(北より。図8－1対応)

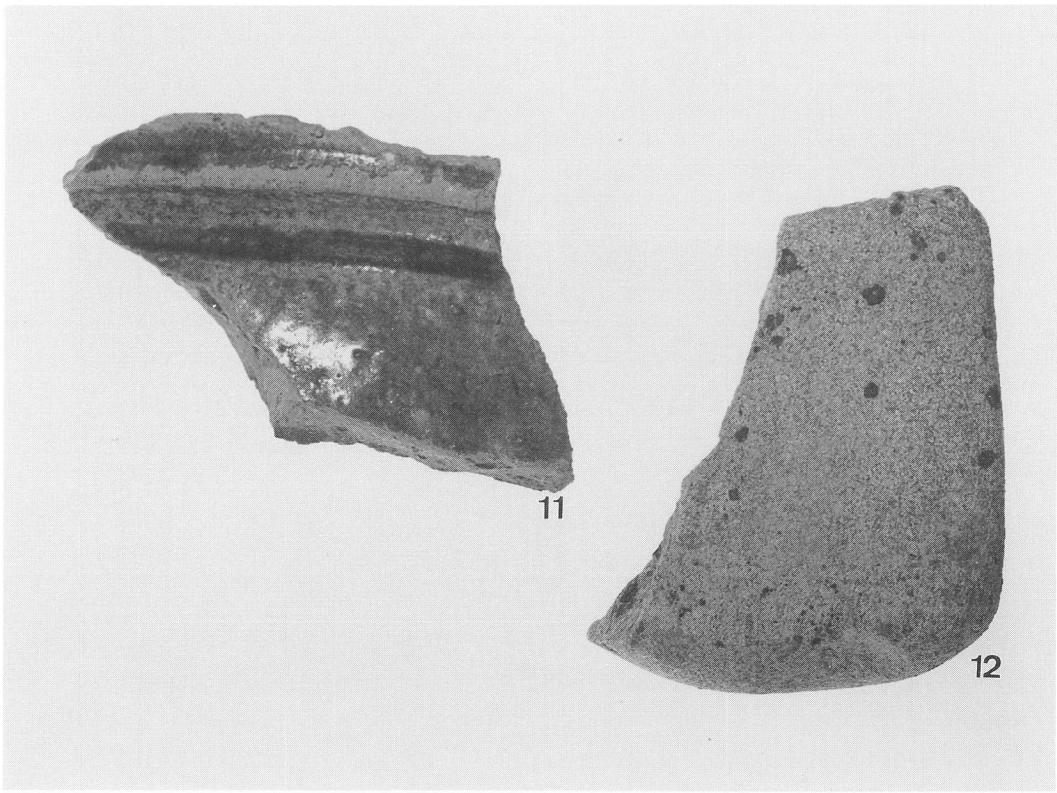
7．SD-03　土層堆積状況(北より。図9－1対応)



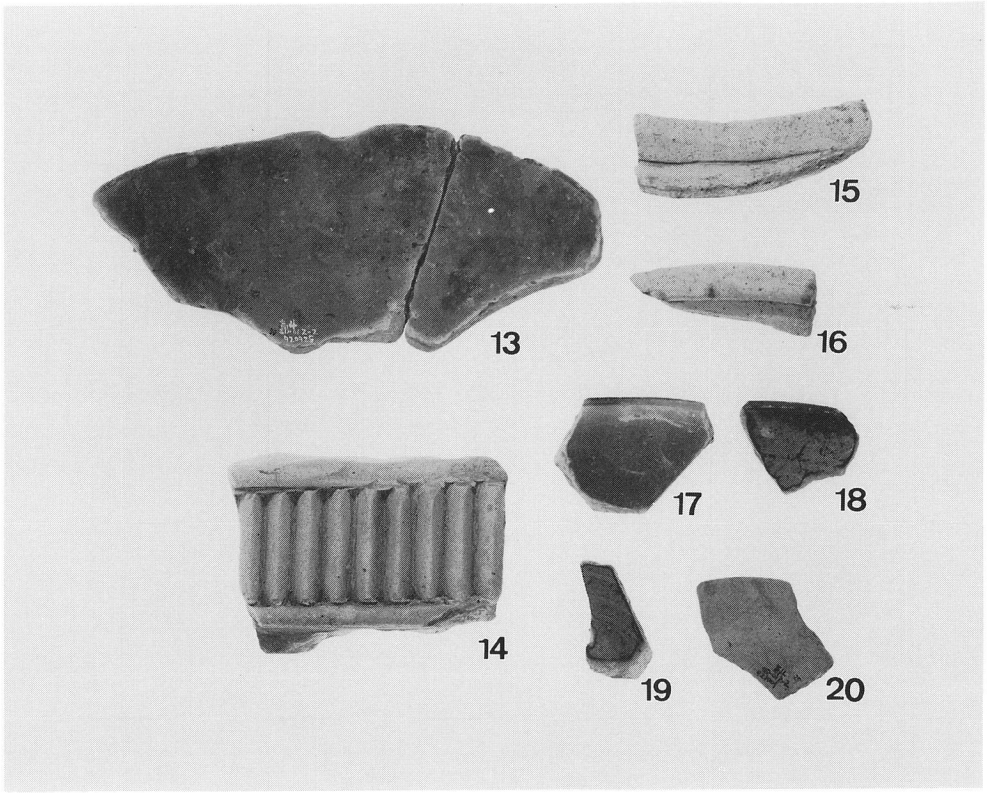
8．SX-01　土層堆積状況(南より。図10－2対応)



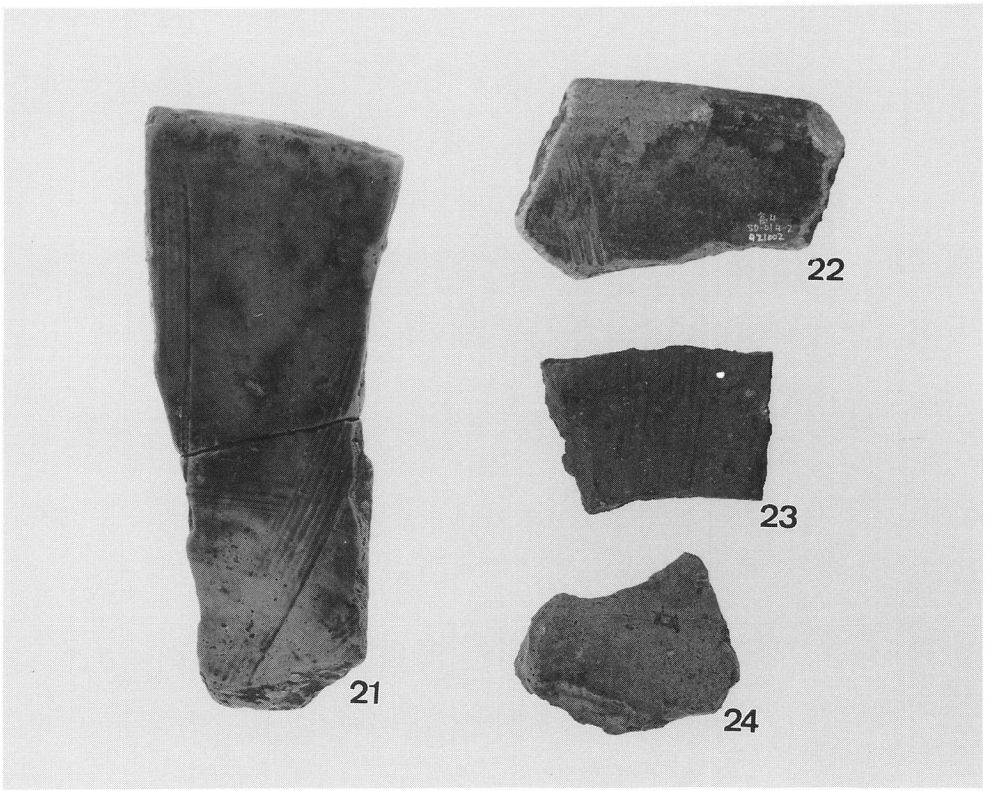
1．SD-01　c層出土遺物



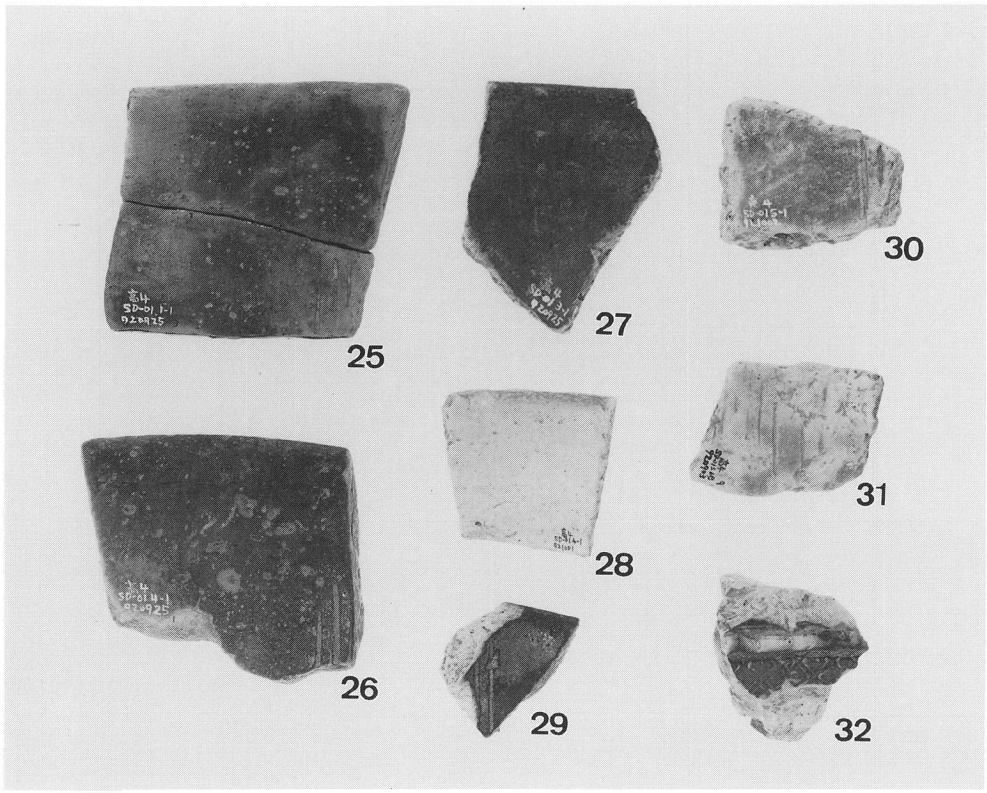
2．同　上



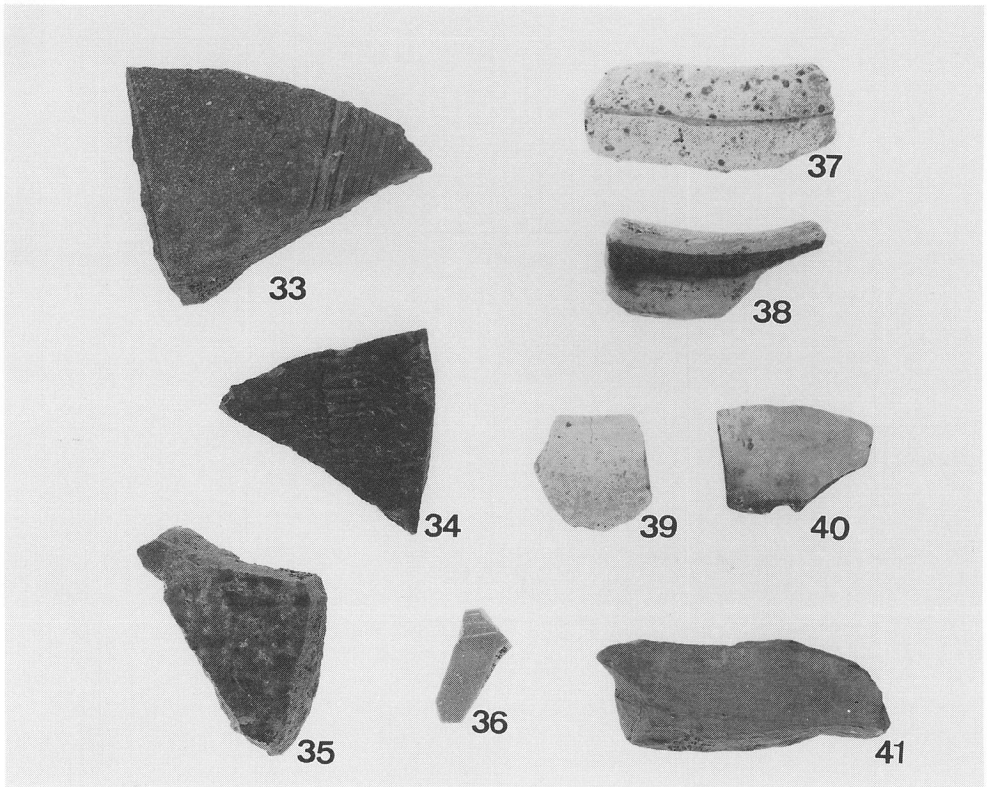
1．SD-01　b層出土遺物



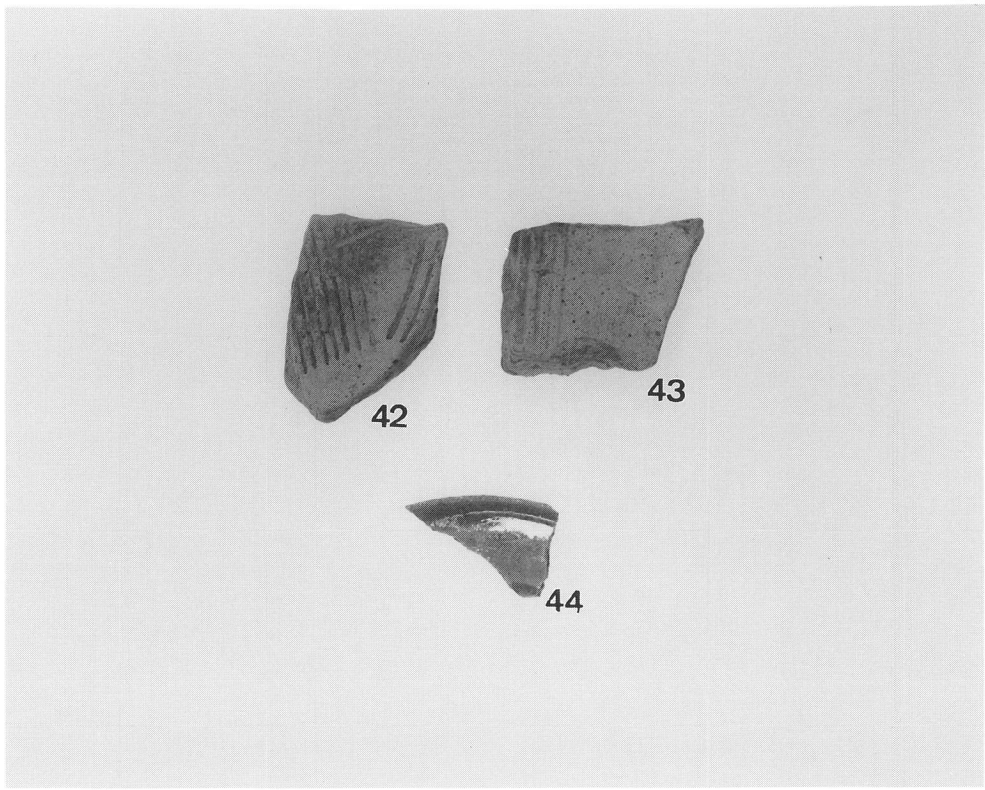
2．同　上



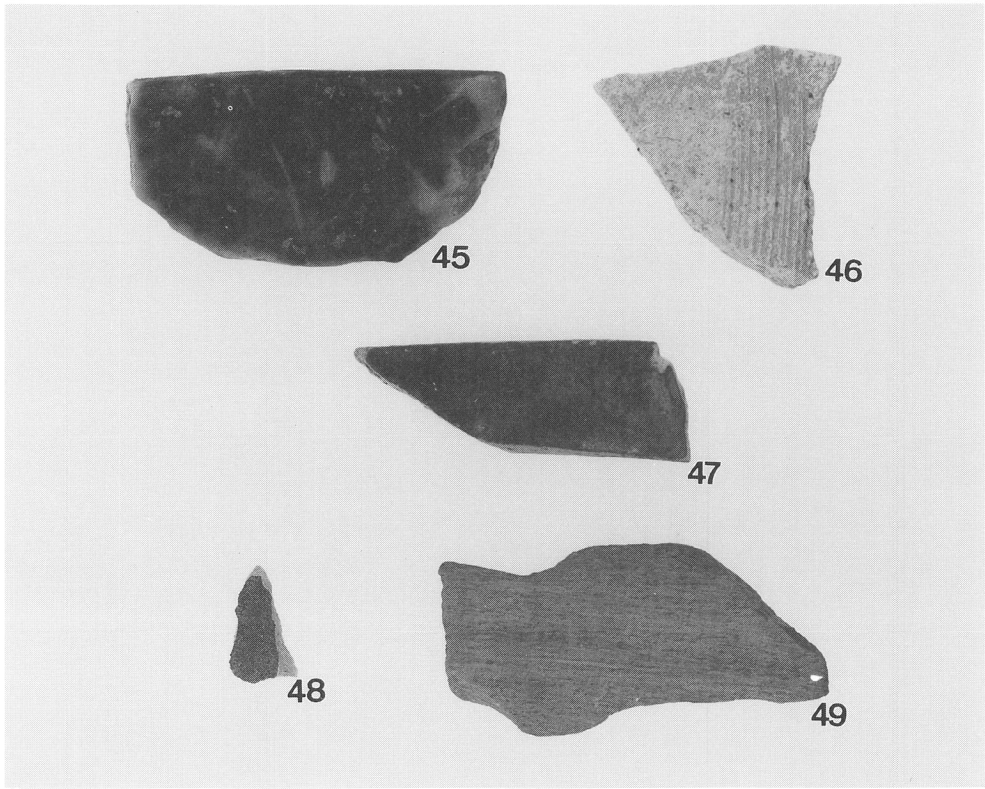
1．SD-01　a層出土遺物



2．同　上



1．SD-03　出土遺物



2．SX-01　出土遺物

大和郡山市文化財調査概要　26

高月遺跡第4次発掘調査報告

平成5年3月31日

発行　大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248－4
印刷　共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号